
赤な彼女と青い僕

かみたかお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤な彼女と青い僕

【Nコード】

N0428C

【作者名】

かみたかお

【あらすじ】

父の病気により、五代目パン屋となったヒヨン。周りの人達に支えられながら日々、頑張っていく彼。パンを焼くことに誇りを持つ彼と、一人の女性が出逢った事から、運命という歯車が動き始める。

雨の日の記憶

（プロローグ）

狭い路地裏を、一人の少年が、颯爽と走る。

あれは12年前、僕が9才の頃の話になる。

代々パン屋を営んできた家系の長男として、生まれてきた僕は、店の手伝いとして、パンの配達をしていた。

父の作るパンは、味が深い事で、街ではちょっとした評判があった。父の友人は、父の作るパンに惚れ込み、経営しているレストランに配達を依頼してくるようになった。

こうして、父の作ったパンを毎日、僕がレストランに届けていた。お店では僕の届けたパンをほおぼって喜んでいる。

そんな人々をガラス越しに見ると、自分まで幸せに感じていた。

（そのパン、美味しいでしょ！僕の父さんが焼いたパンだから、当たり前だよ！）

な～んて、心の中で一人呟いていた。

僕の父は、パン屋の四代目にあたる。

家族は母と僕、あと五才になる妹で四人家族だ。

普段は優しい父だが、パンの事になると、とても厳しかった。

まだ小さな僕に、本気で怒りながら教えていた。

妥協と言う言葉は無かった。

パン作りに関して、父の言う事は、絶対だった。

そんな父の教えに、泣き事言わず一生懸命やっていた。

父がパンを焼く後ろ姿は僕の憧れだったからだ。

いつしか自分も、父のようになるんだと・・・。

なんとか上手に出来ると、心から喜んで見せる父の笑顔が、僕は大好きだった。

古くて小さなパン屋。

決して裕福とは言えない暮らしだったが、僕達は幸せに暮らしてい

た。

季節は、6月になったばかり。

今日も空は、どんよりと曇っていた。

今にも雨が降ってきそうな天気である。

そんな曇り空を見上げ、母の作った手作りのバッグを肩に、いつもの裏街道を走り続ける。

裏街道を走り抜け、表参道にさしかかった頃、とうとう空から飴玉ほどの大粒の雨が降り始めてしまう。

僕は慌てて、バッグを濡らさないように抱きかかえ近くの小さな店陰に入った。雨の降る空を見上げながら、母作ってくれたバッグが濡れないように抱え込む。

初めて自分の為に、作ってくれたバッグを僕は大切にしていた。とても濡らす事など出来なかったのだ。

ほんの小さな子供心だ。

バッグには、青い鈴と綺麗に装飾した胡桃の御守りがぶら下がっている。

これは、以前お祭りで買ってもらった、大切な御守りである。

綺麗にあしらった胡桃は、天気の良い日に空に翳すと、青い鈴と重なって七色に輝く。その輝きを見る度、辛い事など吹っ飛んでしまう。

僕は抱えていたバッグから御守りを外し、空に翳してみる。

七色に輝かない雨の日は、寂しく思える。

御守りをバッグにつけ、雨空を時折覗いてみる。

（やみそうない・・・。）

色鮮やかな傘をさし、通り過ぎる人々を何度も眺めながら、雨がやむのを待ち続けていた。

いくらか時間が過ぎ、小さな視線を不意に横に向けてみた。すると、反対側の店陰に髪をおさげにし、可愛いらしい服を着た少女が、同じように、雨宿りをしていた。

小さなバッグを肩に掛け、不安げに雨空を眺めている。

（同じ年ぐらいかな・・・？）

そんな事を思いながら、少女を見てみると不意に目が合ってしまった。

大きな澄んだ瞳をした少女は、僕を見てにつこりと微笑んだ。

そんな少女の仕草に、僕は急に恥ずかしくなり視線をそらす。

そんな僕の態度を見て、少女はクスツと笑みを浮かべていた。

少女の笑みを気にせず空を眺めていると、少女から話しかけられる。

「雨、止まないね。」

少女の言葉に気付かないふりをする。

「笑った事怒ってるなら、ごめんね。一人だったから、寂しくて・・・。」

少女の大きな瞳が、小さくなり悲しく見えた。

「早く雨止むといいね！」

僕は、不意に言葉を出す。

少女は、僕の言葉を聞いて、眩しいぐらいの笑顔を見せ応えた。

「うん！」

そんな少女の仕草を見た僕は、体中が熱くなりだした。

（何だろう、この感じ・・・。）

「私ね、雨の日は嫌いじゃないんだ。だって、いろんな色の傘が沢山見れるから・・・。何だか嬉しくなっちゃうんだ。」

そう言われると、僕自身も通り過ぎる人々の傘を眺め、いろんな事を考えてた。

次に来る人は、どんな人だとか、傘は何色が多いとか、普段は考えない事まで、考えていた。

僕は思わず、笑みを浮かべてしまう。少女は、僕の顔を見ると、嬉しそうに雨空を見上げていた。

何気ない会話を続けいると、少女の母親らしい人が、傘を持ち慌てて、迎えに来たみたいだった。

少女は、母親の姿を見ると嬉しそうに、母親に抱きついていていた。そんな光景を見た僕は、少し寂しさを感じていた。

少女の小さなバッグから、微かに鳴り響く鈴の音が聞こえる。

赤い色しか見えなかったが、何故か耳にいつまでも残っていた。少女は、母親から傘を受け取ると、空めがけ勢いよく赤い傘を広げた。僕の方をチラツと見ると、笑顔で手を振った。

僕も小さく手を振り、笑顔で見送った。

少女は母親の手を握りしめ、時折僕の方を振り返りながら、雨の力ーテンへと消え去っていった。

僕はまた一人、店の陰に身を潜め、雨が止むのを待っていた。

少女との会話を思い出しながら待っていると、しばらくして、雨が止んだ。

通り過ぎる人々は、傘をたたみながら、歩いていた。

まだ、曇り空の広がる空を見上げた後、僕は、家族の待つ家に向かってまた走り出した。

小さな水たまりをよけながら、僕はまた走り始めた。

少女の笑顔を何度も思い出しながら・・・。

そんな、遠い雨の日の記憶である。

パン屋の五代目

住宅の並ぶある街。朝日の訪れと共に、ある一軒の店の煙突から煙が立ち昇る。

店の奥では、一人の男が、丹念に生地を練り上げている。

生地につながりが見え始めバターを加え更にすり混ぜこむ。

しばらくして、生地を叩きつける音が店内に響き渡る。

生地の出来上がりを確認するかのように生地を伸ばし広げる。

出来映えを確認すると男は黙って、生地を丸くまとめ始める。

丸くまとめた生地は、次々と並べられる。

男は、休む暇なく先に作った生地を半分に分け、生地を力強くぐるぐる丸める。

表面に張りをつけると用意された型に詰めこむ。

発酵を終えた生地を古びた釜戸に入れ焼き始める。

しばらくすると、なんとも言えないパンの香りが漂い始める。

釜戸から焼きあがったパンを取り出し、型から取り出すと今にもはじけそうなパンが姿を現す。男は次々に焼き上げると、店内に焼き上がったパンを並べ始める。店内は、焼きあがったパンの香りで一杯になる。

男は、準備を終えると店のドアを開放させる。

店内に漂っていたパンの香りは、一気に人々の鼻めがけ流れ出す。

男は外に出ると、空を見上げ大きく深呼吸する。

「ふは〜。」

男の名前は、キム・ヒョン。

五代目となったあの少年である。

二年前、四代目の父親が病気で倒れてしまったのである。

本来なら大学生活を過ごしている筈だが、家の家計と父親の入院費を稼ぐ為、大学を辞め家業であるパン屋を継いでいた。

父が倒れ収入のない家族を助けるのは、自分しかいなかった。

母は父親の看病で忙しく体もあり強くない。父が倒れた後、無理がたたり寝込んでしまった事もしばしばあった。

母に無理はさせられない。

それに妹もまだ、高校生。

せめて妹だけは、自分の道を進んで欲しいと考えていた。

妹の学費を稼ぐ為にも僕が働かなければならなかったのだ。こうして、パン屋を継いでみたものの実際に一人でやるのには、かなりきつい。幼き頃から父の背中を見てきたつもりだが、思ってた以上に大変だった。

どんなに忙しくても、決して妥協しない父のパンの味を皆、知っている。

自分が覚えてきた、父から教わった事を何度となく繰り返し今の味を出せるようになった。

そんな僕の作るパンを父親譲りの味だと近所の人達は褒めてくれた。そんな温かい人々に励まされながら、僕は日々頑張っていた。

朝になると近所のおばさん達が、買い出しに来てくれる。

昔から朝食などは、米を食べるのが当たり前だったから、パンなんて、たまにしか食べない家庭がほとんどだった。

近年は、時代とともに変わりつつあるのか、パンを朝食に食べる人々が増えてきた。

そのおかげもあって、日々忙しい毎日を過ごしている。

「おはよう、ヒョン。いつも頂戴。」

店に朝一番に買い出しに来てくれるのは母の古くからの友人のギョ又おばさんだ。

母が、父の看病で家を空ける事が増えてきてからというもの、ギョ又おばさんには大変世話になっていた。

毎朝こうして、僕等の様子を見に来てくれるのだ。

「おはよう、おばさん。いつもありがとうね。」

そう言つて、ロールパンを５個、紙袋に入れ手渡す。

「今日は、お母さん早く帰ってくるんだろ？」

帰って来たら家に来るように言っといておくれ。」

ギョ又おばさんは、そう言って笑顔で帰っていった。

こうした、ギョ又おばさんとの会話も僕の毎日の日課の一つだ。

この店の前は、通勤する人や学生などの通り道。

そのかいもありパンを求めていく人もいる。

僕の友人達もその中の人達だ。

何故だか、大学に行く待ち合わせ場所を店の前にしている。

僕が大学に通っていた頃と変わっていない。しばらくすると、一人の男が店に来る。

「っはよー！あれー？あいつらまだ来てないの？しゃーないなあ、ヒヨン、葡萄パン一つね。」

毎朝、同じ愚痴をこぼすこの男、幼い頃からの幼なじみのイ・ウォンである。

幼い頃はよく喧嘩もしたが、今は僕にとって一番の親友である。

大学を辞めてから二年になるが、店に来なかった日は無い。

彼が、店に顔を出しにくるのは、僕の事を思っただろうといつも感じていた。友達思いのいい奴なのだ。

彼が、美味しそうに葡萄パンをほおばっていると、一人の女性が慌てて、店の前に現れる。

「ふうー、なんとかセーフ！おっはよん！あつ、ヒヨンくん、おはよう・・・。」

頬を赤らめ、恥ずかしながら僕に挨拶を交わすのは、ナ・シュリである。

僕達が中学の時に、ウォンの家の近くに引っ越して来た。

彼女の両親は、ある会社の重役らしく彼女はお嬢さまでところだ引っ越して来て以来、ウォンが夢中になっている女の子だ。

そそっかしいが、友達思いの優しい子だ。

「ヒヨンくん、私もパンください。」

「ああ、何がいい？」彼女は嬉しそうに、

「じゃあ、くるみパン一つ！」

袋に包み手渡すと、嬉しそうにパンをほおばり始めた。

「ドンホンの奴まゝた、ギリギリかよ。待ってる事知ってるのに、あのマイペースは治らないかなあ。」

いつもの愚痴をこぼしながら、待っていると、のっそ、のっそ、と一人の男が歩いて来る。

「うつす。」

いつになく、やる気の無さそうな彼が、カン・ドンホンである。

普段は、やる気が感じられないが、実は成績は一位、二位を争うほどの切れモノである。

シユリの友達として知り合ってからずっと一緒だ。

「ドンホン、もうちょっとでいいから、早く来てくれよ。まあいいや！さっ、行こう。」

こんな感じで、毎朝が始まる。

彼らのお陰で退屈しない日々が続いている。

彼等が大学へ向かった後、今度は妹が慌てて起きてくる。

「あゝ、遅刻しちゃう！もう、お兄ちゃん、何で起こしてくれないの？」

髪を整えながら、慌てる仕草は、母によく似ている。

「何回も起こしているのに起きないお前が悪い。まったく！」

妹は並べてあるパンを一口にくわえ、慌てて家を出る。

「行つてきまゝす。」

遊んでばかりいるせいか、いつも寝坊ばかりして、困ったものである。

騒がしい朝の時間帯を過ぎると、お客もまばらになり始める。

お昼時には、また客足が増える。

それまでの間にまたパンを焼く準備に取りかかる。

「いつでも焼き立てを食べて貰いたい。客の喜ぶ顔こそ、職人の幸せだからな。」

僕の父親の口癖だ。

そんな父の言葉を胸に、焼き立てを提供する事を日々心掛けている。今日はあいにくの天気で、今にも雨が降りそうである。

（今日は雨が降りそうだ・・・。）

日々の気温などもパン作りに、大きな影響を与えてしまう。

湿った空気を肌を感じとり、パンの発酵時間を考えなければならぬ。

店の奥で作業をしていると、店のドアの鐘が店内に鳴り響く。

「チリ〜ン。」

大学生ぐらいの二人の女性客が店を訪れる。

「いらっしやいませ。」

二人は並べてあるパンを覗き込んで、楽しそうに会話をしている。

「これ、美味しそうね。」

二人の顔から、笑みがこぼれる。

おさげをした方の女性が、くるみパンを指差す。

僕は、くるみパンを紙袋に詰めるともう一人の女性がお金を払った。彼女達は、紙袋を覗き込み、顔を見合わせ喜んで店を出る。

パンを作る者にとって、幸せな光景である。

自分の焼いたパンを嬉しそうに、美味しそうに食べる光景が、頭をよぎる。

父の言っていた言葉通り、お客さんの喜ぶ顔こそ職人の財産。

父の信念を胸にまたパンを作り始める。しばらくすると、とうとう雨が降り始めた。

僕は、慌てて店の入口に並べたパンを店内に並べ替える。

窓越しに雨空を見上げ、思わずため息をつく。

「はあ、客足が遠のく・・・。しょうがないか。」

店のカウンターには、あの御守りが飾られている。

御守りは、日差しの無い空を寂しそうに眺めている。

店の奥に戻ろうとした時である。

再び店のドアの鐘が鳴る。

振り返ると、一人の女性が雨に濡れ、窓越しに雨空を眺めている。

「あゝあ、とうとう降ってきちゃった。どうしよう・・・。」
(ただの雨宿りか?)

とりあえずカウンターに戻ってみる。

「いらつしゃ・・・?!? あゝ、店の床が水浸しに!」

僕は慌てて床を拭く。

「えっ、あつ、す、すいません。すぐ拭きます。」

女性が慌てて床を拭こうとすると、カバンが僕の頭に直撃する。

「!?? たあゝ。」

驚いた顔をした彼女は、謝り始める。

「ご、ごめんなさい。大丈夫ですか?」

そんな彼女の言葉に耳も貸さず、黙って床を拭く。

「す、すいません。」

僕は、少し膨れ面で応える。

「雨降りなので、雨宿りも結構ですが、営業妨害だけはやめて下さい。」

「!?? わ、私がいつ営業妨害をしたんです?」

僕は、床を指差す。

「・・・い、今、謝ったじゃないですか?それに、床が少し濡れたぐらいで・・・。」

僕は顔をこわばらせ彼女に言った。

「食べ物扱っている店にとって、店の中は常に綺麗なイメージが必要なのに、入口がびしょ濡れになった店に入ったお客さんは、どう思いますか?」

彼女は、そっぽを向きながら聞いている。

「僕達は、遊びでパンを売ってる訳じゃないんです。」

僕は、床を拭き終わると店の奥へ向かった。

彼女は、そんな僕を気になけながらも、ふと店内を見渡す。彼女は、並べてあるパンを覗き込むと思わずパンの匂いに酔いしれてしまう。
(すごく懐かしい香りがする・・・。)

店の奥へと向かった僕は、少し色あせた傘を取り出し店内へと戻る。

「古いけど、良かったら使って下さい。」

何事もなかったかのように傘を差し出す。

「えっ！」

彼女は最初は少し戸惑ったが、彼の好意を受ける事にする。

「あ、ありがとう・・・。」

（ボロいけど、この際しようがないか。）

「気にしないで下さい。困った時はお互い様ですから。」

（早く、傘持って出て行ってくれ。）

二人はお互いに顔を見合わせ苦笑い。

彼女がドアを開け店を出ようとした時である。

「ねえ、ちよつと。」

僕は不意に彼女を呼び止める。

「まだ何か？」

不機嫌そうに振り返る彼女。

「これ、持っていくなよ。」

紙袋を一つ彼女に渡す。

「何ですか、これ？」

「あなたが先ほど見てた、葡萄パンです。」

「見てなんかいないわよ。要らないわ！」

「いいから！店に来てパンを持たずに帰った人はいないんだ。金は

いいから、持ってってくれ。」

しょうがなさそうに彼女は、紙袋を受け取ると、雨の降る外へと駆

け出した。

「あんな客初めてだ！まったく！塩まいとこ。」

雨の中を駆け出した彼女は、膨れた顔をしながら歩いていた。

「ホント、腹が立つわ。謝ったのに、あんな態度。パンを持ってい

けですって？こんなの要らないんだから！」

彼女が紙袋を投げ捨てようとした時だった。

「クウ。」

腹の虫がおさまらないどころか、鳴いている。

「ま、まあ、せつかくくれたんだからね。あいつが持つてけつて言
つたんだから・・・。」

彼女は、立ち止まり紙袋からパンを取り出した。
甘い葡萄の香りが、彼女の鼻飛びつく。

ゆつくりと口にパンを運び、ひとかじりする。

あまりの美味しさに彼女は、目を丸くする。

「えっ、パンってこんな味するの？」

思わず後ろを振り返る。

彼女は、ひとかじりしたパンを見つめ、少し笑みを浮かべる。
再び歩き始めた彼女のバッグの赤い鈴が辺りに鳴り響く。

二人の運命の齒車はこうして再び動き始める。

父との思い出

雨も小降りになり始め、昼になった。

小降りになったが、やはりお客は、いつもより少なかった。

残念だが、天気には勝てない。

どこからともなく聞こえる、カエルの声。

（喜んでるのは、カエルだけか・・・。）

暇な時程、いつもは気にならない事に耳を傾けてしまう。

周りに気を取られていく間に、もう昼の3時を過ぎていた。

もうすぐ、友達みんなが店の前を通りかかる頃だ。僕は、友達を通るのを窓越しに待ち続けていた。

しばらくして、小雨が降る中をシュリとドンホンが帰って来る。

「あゝ、雨の日はもう・・・。」

ドンホンが愚痴をこぼしながら店に入ってくる。

シュリも後ろから、ひょこっとなついて来る。

「しょうがないよ。雨も降らないと、俺達干上がっちゃうだろ。」

「そりゃそうだ。あつ、クロワッサンサンドーっね。シュリは？」

「わたし？んゝどうしようかな？」

シュリのおどけなさは、妹のスギョンに良く似ている。

「シュリ、ちよっと試しに作ったパンがあるけど、食べてみるか？」

「えっ、いいの？」

「ああ、その代わり感想を正直に言っと約束しないと駄目だ！」

「約束する、約束する！」

シュリは目を輝かせながら応える。

「おい、俺のは無いのか？」

ドンホンは、不服そうな顔つきで言う。

「あれ？お前はクロワッサンサンドなんだろ？それに、甘い物が嫌いなお前には、むいてないと思うけど・・・。」

「何作っただ？」

「夏みかんの果汁と蜂蜜を染み込ませたカステラパンだよ。」

「うえゝ、ならいらね。」

「それにしても、何で甘い物が嫌いなんだ？すごく美味しいのに・・。」

「あの喉にくる甘味が本当に嫌なんだよ！好きな奴らの気が知れねえ、ったく！」

僕とシュリは顔を見合わせ思わず、笑ってしまう。

「シュリ、これだよ。食べてみてくれ。」

甘い香りを漂わせながら、シュリの前にそつと差し出される。

「美味しそう、いただきます。ハグッ！んゝ、甘ずっぱくて美味しい！カステラのふんわり食感もいいわ。」

「そうか？なら、店に出していこうかな？」

「うん、絶対売れるよ。」

シュリは、自分の事のようにはいやいでいる。

ドンホンは、カステラパンから視線をそらす。

「そつえば、ウオンは？」

「ああ、何か忘れ物取りに行くつて、大学に行ったぞ。」

「そうか？」

（いつもシュリと一緒になのに、珍しいな？）

僕が考えていると、ドンホンは、シュリの方をチラッと見る。

「俺、用事があるから先に帰るわ。じゃあな、又明日。」

「えゝ、帰るの？じゃあ、私も・・。」

「ゆつくりしてけよ。まだ、雨降つてるし。また、明日な！」

ドンホンはそう言つて一人、店を出て行った。

シュリは、振り返ると僕の顔を見るなり黙ってしまう。

（何かこういう雰囲気ヤバイな。）

僕は、店の中を片づけながらシュリに話かける。

「最近、大学はどう？」

「えっ！？う、うん。楽しいよ。」

「そうか、ウオンの奴は、ちゃんと講義聞いているのか？」
「いつも半分寝てる。」

「ったく、しょうがない奴だな。」

「ね、ねえ、ヒョンくん。」

「何？」

シユリは、ためらいながら話を切り出した。

「あのね、今度の日曜日、お店休みでしょ？」

「ああ、そのつもりだけど……。何かあった？」

シユリは、少し残念そうに話始める。

「私の誕生日。」

僕は、ハッと思い出した。

（しまった、すっかり忘れてた。）

「あゝ、ごめん。忘れてたよ。」

「日曜日に、パーティーするんだけど……。来てくれる？駄目かなあ……。」

シユリは、今にも泣き出しそうな顔つきで僕を見る。

（断ったらウオンに何されるかわからないしなあ……。）

「一応、母に聞いてからにするよ。多分、行けると思うよ。」

「本当？」

さつきまで、泣き出しそうにしてた顔が、子供のような笑顔に変わる。

「じゃあ、日曜日待ってるね！」

シユリは、そう言い残し店を出て行った。

「ったく、子供みたいだな。」

僕は、笑みを浮かべながら、また仕事に励み始める。

小雨がやみ、いつしか夕暮れ時を迎えようとしていた。

僕が、店先を片づけ始めた頃だった。

一人とぼとぼと、ウオンが店の前を通りかかった。

「おい、ウオン！どうしたんだ？浮かない顔して。」

ウオンは、疲れ果てた顔で、話始めた。

「どうしよう！」

思い詰めた顔つきで、僕の顔を見合わせる。

「どうしたんだ？何があったんだ！」

絶対に弱音など吐かないウォンだが、いつもと違う態度に驚いてしまっ。

「実は、シュリの・・・。」

「シュリと何かあったのか？」

「お前、今度の日曜日シュリの誕生日だって知ってるよな。」

「あ、ああ・・・。」

（実は、忘れてた。）

「お前、当然プレゼント買っただろ？」

「！？ま、まあな。」

（しまった！思いつきもしなかった！）

「で、お前が悩んでる理由が、もしかして・・・。」

「そうなんだよ！今日、買いに行ってみただけど、なかなか決まらなくて・・・。あれもこれも見ていくうちに、わけわかんなくなっ。・・・。ヒョン、どうしたらいい？」

（自分のも買ってないのに・・・。）

「ちえっ、しゃあないなあ。シュリの好きな物を選んでもいいし、お前がシュリに送るんだ。誠意のある物なら何でも喜ぶだろ。」

「誠意のある物って何だ？」

僕は、頭を抱え込んだ。

「わかった。シュリは、アクセサリが好きだろ！だったら、首飾りみたいな物はどうか？以前、みんなで買い物行った時、シュリだけずっとビーズの首飾りをじっと見てただろ？お前、その時早く行こうって、せかしたじゃないか？覚えてないか？」

ウォンは、記憶を辿るような顔つきから、思い出したように声を張り上げた。

「あゝ、あの時か！確かに、じっと眺めてた。あれかゝ！」

「もう、いいか？」

「ヒョン、やっぱり持つべきは友達だな！サンキュー！」

ウオンは、僕に礼を言つと又、街の方へと姿を消した。

僕は、ホッとため息をこぼす。

「つて、人に言ってる場合じゃないな！」

しばらく考え込んでいると、妹のスギョンが帰つて来た。

「お兄ちゃん、ただいま！母さんは？」

「あつ、おかえり。母さんは、まだ帰ってないんだ。それより、お前遅いんじゃないか？」

「友達とちよつと・・・。」

「ちよつとが何時間なんだ？えつ？」

「もう、いいじゃない！少しくらい。」

「毎日だ・・・。」

少しこわばった顔つきで言うと、妹はしよげて家へと入って行く。妹もちょうど難しい時期でもある。

最近、仲のいい母がいけないのも理由の一つなのだろう。

あまり期待をかけても負担になるだけ。辛い思いをするのは妹だ。

（妹に、頑張つてほしいと思うのは、自分のわがままなのだろうか？）

気付けば、自分を責めていた。

自分の出来なかった事を不躰に押しつけていたのかもしれない。

曇りがかった夕暮れの空を眺め、一人黄昏に浸っていた。

「ただいま、ふう」。今日は一段と電車が混んで、大変だったよ。

「

母が帰ってきた。

手には、重たそうな荷物を抱えている。

「おかえりなさい、母さん。遅かったね。何を持って帰ってきたの？」

母の手荷物を受け取り中を覗いて見る。

「お見舞いでもらった、果物だよ。ヒョンに渡してくれって。」

「父さんに食べさせてあげれば良かったのに・・・。」

「あの人は、病気になってもパンの事しか頭にないの。それに、ヒヨン。あなたのパンの評判がいつて聞いて、喜んでたよ。」

「そうか、良かった。スギヨンも心配してたんだよ。家に入って、顔見せてあげなよ。」

「ああ、そうだね。」

母は、家の中へと入って行った。

僕は、残った店の片付け終えさせる為、もうひと仕事する。

店の片付けを終える頃、妹が顔を出す。

「お兄ちゃん、ごめんね・・・。」

落ち込んだ妹が、謝りに来た。

「俺も言い過ぎた。ごめんよ。遊ぶのもいいけど、ほどほどにな。」

「うん、わかった。これからは気をつけるね。」

妹の素直な言葉を聞きホッとした。

「お母さんが待ってるよ。」

「ああ、すぐいくよ。」

エプロンを外し家の中へと向かう。

（そういえば、ギヨ又おばさんが呼んでたな。）

ギヨ又おばさんに頼まれていた言伝を母に伝える。

「母さん、ギヨ又おばさんにね、母さんが帰ったら、家に来るようにと言伝頼まれてただけど。」

「へえ、ギヨ又が？何かしらね？わかったわ。じゃあ、ちょっと行ってくるから。」母は立ち上がり、ギヨ又おばさんの家へと向かった。

「スギヨン、手伝ってくれ。」

僕は台所へと向かい夕食の準備をする。

「お兄ちゃん、今日は何作るの？」

「豆腐チゲにする。スギヨンは野菜を洗っておいで。」

「はい。」

僕達の家族では、ごく日常的な光景である。

母がいない日が多かった為、僕が料理を作っていた。

妹には評判がいい。

妹が野菜を洗っている間に、米を炊く。

チゲが出来上がる頃に、母が帰って来た。

「ギョ又おばさん、何だつて？」

母は帰ってくるなり涙を流しながら、一枚の封筒を差し出す。

「お父さんの見舞いだと言って、これをくれたの……。いつも世話になってばかりなのに、こんなもので……。うう、うう。」

僕達、家族を思うギョ又おばさんの好意に、みんなが言葉を失う。

「母さんの友達はみんないい人ばかりだ。父さんが良くなるように僕達も頑張らなきゃ。ねっ！」

「そ、そうだね。こうやって、気遣ってくれてる人達に恥じないように、頑張らなきゃね……。」

「お母さん……。私も頑張るからね。さあ、家に入ってご飯食べよ。」

母と妹は肩を並べ家に入ってしまった。

母達に言った言葉が、胸を刺す。

僕達の父はもう長くはない。

体を癌に蝕まれている。

母は僕には話したが、妹にはまだ言っていない。

幼い頃から、親を人一倍思うスギョンにとって、とても辛い告知となる。

ましてや、余命半年……。

高校を卒業するまでは、黙っておこうと母と相談して決めていた。

薄暗くなった空には、小さな星達が光輝いている。

星空を見上げ、グツと涙をこらえながら、昔を思い出していた。

「お父さん……。お父さんってば！」

「おお、ヒョンか？どうしたんだい？」

「今何してるの？」

「ああ、これかい？これは、パンのもとを作ってるんだよ。」

「パンのもと？」

「そうだ。こうやって、葡萄をつけておくと、こんな風に沢山の種が出来るんだよ。」

「へえ、でも僕はそのままの葡萄が食べたいな。甘くて美味しいやつ。」

「はっはっは。ヒョンは、正直だな。でも、このもとを使って焼いたパンは、もっと美味しいぞ！」

「本当？」

「本当だとも。父ちゃんが嘘ついた事があるかい？」

「ううん。よし早速作ってみるか。」

「わあい、楽しみだな。」

僕が五歳の頃の思い出だ。

この時から、パン作りに興味を持ち始めた。

以来、父の横でパン作りに夢中になってた日々が、懐かしく思える。潤んだ目から、一粒の涙が頬をつたう。

（父さん・・・。）

涙を拭い、そつと星に願いを込める。

「お兄ちゃん！食べちゃうよ。」

妹の声が外に響く。

「今行くよ。」

父の身を案じながら、家族の待つ家の中へと入っていった。

僕を支えてくれる人達

今日は、昨日と違い朝から天気が良くなった。

白い雲は、真つ白に輝き、空を優雅に流れていた。

店の支度を終えた僕は、空に向かって、大きく背伸びをする。

「んあゝ。おっし！」

空を眺め、ちよつとした笑みを浮かべる。

「今日は、昨日より忙しくなるだろうな。」

僕の前では、人通りも少しばかり、多くなり始めていた。

そんな人達の間を縫って、ギョ又おばさんが、今日も一番に店を訪れた。

「おはよう、ヒョン。いつもの頂戴。」

「おはよう、おばさん。母から聞きました。お見舞いを頂いたそう
で、本当にありがとうございます。いつも、お世話になってばか
りなのに……。何て御礼を言ったらいいのか……。」

「もう、あの子ったら、もう喋ったのかい？別に大した金額でもな
いし、それにあんた達が頑張っている姿を見たら、何かしてあげた
くなってねえ……。気にしないでくれ。ほんの気持ち程度だよ。
それより、いつものパンまだかい？」

「おばさん……。」

僕は、言葉無くしながらも、ロールパンを紙袋に入れる。

紙袋にパンを入れてる最中、何かを思い出したかのように、僕は店
の奥へと向かった。

ギョ又おばさんは、不思議そうな顔で、店の奥を覗き込んでいた。
少しして、僕は紙袋を二つ抱えて店の奥から出てくる。

「ごめんね、おばさん待たせちゃって。はい、おまちどおさま。」

ギョ又おばさんは、紙袋の中を覗き込む。

「私、これ頼んだ覚えはないけど……。それに、初めてみるけど？」

何だいこれ？」

「今日から、お店に出す事にした、夏みかんと蜂蜜のカステラパンなんだ。僕の家には、これといって御礼が出来る物もない。だからせめて僕が作ったパンを御礼代わりにと思っ……友人に食べてもらったけど、美味しいとお墨付きもらったんだ。お婆さんの口に合うかわからないけど、良かったら食べて下さい。」

「あんたって子は、こんな事しなくてもいいのに……。わかったわ、ありがとうヒョン。すごくいい匂いがするねえ、このパン。あとで、美味しく頂こうかね。」

ギョ又お婆さんは、喜んでくれた。

「お婆さんも、食べたら感想聞かせてよ。約束だよ。」

「はい、はい。わかりましたよ。」

ギョ又お婆さんは、そう言っって笑顔で帰って行った。

「おはよう、お兄ちゃん！」

妹のスギョンが、珍しく早起きしてきた。

「おはよう、珍しいな！スギョンが早起きなんて。」

「私もやる時や、やるんだから。」

「いや、これが当たり前なの。」

「ちえっ、誰も誉めてくれない！せつかく、早起きしたのに……。ブー！」

スギョンが、へそを曲げてしまう。

「わかった、わかった。偉い、偉い！これでいいか？」

「何か、やけくそみたいで変な気分……。」

「母さんは？」

「今、ご飯作ってる。」

「そうか……。ならお前も手伝ってこい！そしたら、ちゃんと誉めてやる。」

「んー、何か子供扱いされてる気がするけど、まあいいか。わかった。じゃあ、出来たら教えるからね。」

「ああ、わかった。」

スギヨンは、さつと家に入ってしまった。

今日は、母は家にいる。父の看病で、少し疲れ気味なのが、気になる。

朝のラッシュ時までには、少し時間がある。その時間の合間をみて、いつも朝食をとっていた。

当然、忙しい時は無理だが・・・。

今日は、少しの間なら時間が取れそう。

「お兄ちゃん、用意出来たよ。」

スギヨンの声が、こだまする。

僕は、看板をひっくり返し、家の中へと戻っていった。

「母さん、おはよう。」

「おはよう、ヒョン。お腹減ったろ、お食べ。」

「じゃあ、早速！いただきます。」

「お兄ちゃん！久しぶりに家族で、朝ご飯食べるんだから、みんな一緒に食べようよ。」

「！？おお、そういえばそうだな。母さん、一緒に食べようよ。スギヨンが、またへそ曲げるよ。」

「誰がへそ曲がりですって！」

「ほら、母さん！」

「はい、はい。もう、あんた達は仲がいいのか、悪いのか。」

「お兄ちゃんの、一言が余分なんです。」

「そんな事より、このスープ旨いね。やっぱり、母さんだ。」

「本当！」

「ん、何でお前が、言うんだ？」

「だって、私が作ったんだもん。」

「これを？お前が？」

「そうだよ。私が、横でちゃんと見てたから。スギヨンも、頑張ってたからね。お兄ちゃんには、黙ってて。なんて言いながらね。」

「お母さん・・・。」

スギヨンは、ちよつぱり恥ずかしそうにしていた。

「スギヨン、旨いよこのスープ。朝早起きたかいがあつたな。」

「やった！やつと、誉めてもらえた。」

僕は、きれいにスープを飲み干し、立ち上がった。

「じゃあ、母さん。俺、仕事するから。あつ！今度の日曜日、シュリの家でパーティーやるんだ。お店休みだから行つてもいいかな？」

「たまには、息抜きしておいで。いつもすまないねえ。お店は私がやるべきなのに……。お前には感謝してるんだよ。」

「そんな事はいいんだよ。それより、今日スギヨンが学校から帰つたら一緒に買い物行つてきなよ。スギヨン、今日は、早く帰れるだろ！」

「うん、でもいいの？お店大変じゃないの？」

「いつも終わる頃に……。んぐっ！？」

スギヨンは慌てて口をふさぐ。

（お願い、黙つて……。もう、しないから。）

「スギヨン。母さん知ってるからね。」

「えー！こ、これからは気をつけます……。」

「あまり、心配させないでよ。遊びもいいけどほどほどにしなよ。」

「ハ〜イ。ねえ、お母さん？今日、どこに行く？」

「もう、この子ったら！」

僕と母は、そんなスギヨンを見て笑っていた。僕達は、家族のほんのひとときの幸せを感じていた。

店の前は、既に人通りが多くなり始めていた。

「いらつしやいませ。」

次々と通勤する人々が、朝食や昼食用として買い求めに来る。家の中から、スギヨンが客をひらりとかわしながら、僕に近づいてくる。「今日は、お客さんが多いね！お兄ちゃん、頑張つてね。いつてきます。」

スギヨンは、元気よく学校に向かった。

そんな、妹の後ろ姿を、いつまでも眺め見送る。「すみません。こ

れ下さい。」

「あつ、はい。すいません、お待たせしました。」

今日は、朝から本当に忙しくなった。

しばらくして、通勤する人々もまばらになり始めると、今度は学生達が、店を訪れ始める。

その学生達に混じって、友人達も店の前に集まる頃だ。

「おはよう、ヒョン。」

ウォンが、朝からニコニコしながらやって来た。

「おはよう、ウォン。そういえば、例の物見つかったのか？」

（まあ、顔見ればわかるけど・・・。）

「おお！おかげで、何とか見つかったよ。いやあ、一時はどうしようかと思ったけど、やっぱり持つべきものは、友達だな！ありがとな、ヒョン。」

ウォンの喜ぶ顔は、自分の事のように嬉しい。

「ところで、お前は何か買ったんだろ？」

「えっ！ああ、まあな。」

（ドキッ！ヤバイ・・・。）

「何買ったんだ？俺にこっそり教えるよ、なつ、いいだろ？」

「い、言ったら、つまらないだろ！それに、普通は黙っておくもんだろ。じゃなきゃ、プレゼントの意味が無くなるからな。」

（これで、どうだ？）

「うーん、そう言われると・・・。あゝもう！教えてくれない、駄目？」

「駄目！」

ウォンは、残念そうな顔でいつもの一言を繰り返した。

「あいつら、遅いな！ヒョン、葡萄パン一つな。」

「はいよ。」

（ふう、何とか切り抜けた。危ない、危ない。）

葡萄パンを紙袋に入れている間に、シュリがやってくる。

「おっはよん！あつ、ヒョンくん・・・。おはよう。」

「やあ、シユリ。おはよう。」

シユリは、いつもと違う、ちょっぴり嬉しそうな素振りを見せる。
「なあ、シユリ。今度の日曜日のパーティー、俺達の他に誰か来るのか？」

ウオンは、シユリに唐突に聞く。

「えっ！ああ、そういえば言ってなかったね。私の友人があと二人くるわ。」

「ふ〜ん、誰？」

「んとね、お父さんの知り合いの娘さん達。名前はカン・ミンジュさんとユ・スジンさん。」

「女二人来るのか？ふ〜ん。聞いた事ないな。」

「たまに逢って、食事とかするぐらいなんだけど、仲良くしてもらってるの。メールもやってるんだ。」

「どこの娘達だ？学校じゃあ聞いた事ない名前だけど。」

シユリは少し困った様子で、考え始めた。

「ん〜、まあいいか！実はね、彼女達お父さんの取引先の社長の娘さん達なの。」「はあ〜？って事は社長令嬢って事？」

「うん。でも、私が言った事黙っててね。口止めされてるの。」

「まあ、確かにお前の家も会社の社長なのは知ってるけど……。」

「ご両親がいい人だから、今もこんな付き合いが出来るが……。」

僕は、びっくりした。シユリのパーティーを軽い気持ちで考えていた事に、僕は自己嫌悪していた。

（しまった、シユリの家は金持ちなのすっかり忘れてた。）

「でも、その社長令嬢さん達だっけ？俺達が行く事、知ってるのか？」

「ええ、もちろん。ちゃんと話したわ。そしたら、とっても楽しみにしてるって言ってるわ。よくわからないけど……。」「僕は、不安げにシユリに聞いてみる。

「俺達が行って、場違いじゃないのか？どう考えたって、社長令嬢の人達とパーティーなんて、俺達には酷過ぎないか？」

「・・・。」

シユリは黙り込み、今にも泣き出しそうな顔で、落ち込んでいた。
「おい！ヒョン。シユリが困ってるじゃないか！まあ、あちらさんも身分を隠してパーティーに来るって、言ってたんだ。知らなかった事にすれば、どうって事ない！違うか？それに、シユリの誕生パーティーをつぶしたいのか？」

ウオンは、必死になってシユリをかばう。

「パーティーを潰す気なんてないよ。ただ、不安だったから・・・。」

「何が？」

「見ての通り家は、貧乏だし・・・。大した服も無い。さらし者になるのは嫌なんだ。」

「そうか、わかった。じゃあ、葡萄パン全部くれ！」

突然のウオンの言葉に、僕は驚いた。

「お前、何言い出すんだ！気でも狂ったか？」

「どうせお前は金をやるって言ったって受け取らないだろ！だけど、パンを買う事は出来る。パンが売れば、服だって買えるんだろ？だったら、俺達がパンを買えばいい。なっ、シユリ！」

落ち込んでいたシユリは、笑顔を取り戻し僕に言った。

「胡桃パン全部下さい。」

僕は二人の言葉に言葉を失ってしまう。

二人は顔を合わせ笑っていた。

「ちえっ、ずるいなあ。俺も仲間に入れろよ！フランスパン下さい。勿論、全部。」ドンホンが横からひよっこりと現れる。

「んーだよ！ドンホンおっせえよ。」

三人は、いつものように愚痴り合い、笑い合っていた。

（みんな・・・、済まない。）

三人の姿を眺めながら、僕はそっと心の中で呟いた。

「シユリ、さつきは済まない。悪かった。」

「うつん、黙ってた私達が悪いから。パーティー来てくれる？」

「みんながここまでしてくれたのに、行かなかったら、合わす顔がないよ。」

「これで、ビシッと決めて来なかったら、俺が許さないからな！」

「ああ！カッコイイ服見つけに行かなきゃな。」

僕は、照れくさそうに応えた。

「さうてと。じゃあ、行つてくらあ。」

「さう、どうするこのパン？」

「みんなで分けて食べればいいさ。」

「もつと売れるように、みんなに食べてもらおうかな？」

「おっ！いいねそれ！」

三人は、大きな紙袋を抱え喋りながら、大学へと向かった。

「今日はちよつと早めに切り上げて、買い物に行かなきゃな。そうだ！母さん達と一緒に行こうかな？」色々考えていると、背中に人の気配を感じ取る。

（お客さんかな？）

「いらつしゃ・・・、い・ま・せ。」

振り向くと、あのカエル女いや雨宿りをした女が立っていた。

昨日は、雨に濡れてたせいでよくわからなかったが、身に付けてる物や服はちよつと高そうな物ばかりに見える。

（カエル女にしちゃあ、まともな格好だな。）

「あのう、昨日はすみませんでした。お借りした傘のおかげでとても助かりました。」

彼女は、御礼を言うつとバッグから一枚の封筒を取り出した。

「昨日の御礼です。受け取ってください。」

「あのう、心使いは嬉しいのですが、要りません。」

（傘置いてはよ帰れ。）

「でも・・・。」

（このスカポントン、お金が欲しいんですよ。早く受け取りなさいよ。）

「要りません！傘は返してもらいましたんで、お引き取りください

！
」

（あゝ、うつとおしい！）

彼女は、顔をしかめ椅子に座り込む。

「受け取ってもらうまでは、帰りません。私の気が済みません。」

（貧乏人は、これだから嫌なの。これだけじゃ足りないのかしら？）

僕は、膨れっ面で考え込んだ。

「わかりました。」

彼女はニンマリ笑みを浮かべる。

（ほらね、やっぱり欲しいんじゃない。）

僕は封筒を手に取り、口を破ってお金を取り出した。

「何、足りないの！」

（ガメツイわね。私の前で、中身を見るなんて。）

僕は、中から千ウオンだけ取り出し、カウンターへと向かった。

彼女は、不思議そうに僕の行動を眺めている。

カウンターから小銭を取り出すと、戻って封筒に入れた。

「あなたにあげた、パンのお金だけいただきます。残りは要りません。お買い上げありがとうございました。」

僕はそう言って、店のドアへと向かった。

彼女は啞然とし、動かない。

「ちよ、ちよつと。何故お金を受け取らないの？昨日の事を謝りに来たのよ。悪いと思ったから。でも、あなたはお金を受け取らない。お店の雰囲気からして、儲かってないんでしょ！素直に受け取りなさいよ。」

「言いたい事はそれだけですか？」

「くうく、こんなお店潰れたらいいわ！フン！」

彼女は怒りながら店を後にした。

「あの、カエル女。言いたい放題だな。塩まいとこ。あゝ、思い出したら、腹が立ってきた。」

「あの男、救いようがないウストラトンカチね。パパに言っであの店、

潰して貰おうかしら？気分悪いったらありやしないわ。」「ピロロロッ、ピロロロッ。」

彼女はバッグをさばくり携帯を取り出す。

「誰からかしら？あつ、シュリからだわ。もしもし、ゴメンね！今日連絡しようと思ってたの。うん、うん。今度の日曜日でしょ？大・丈・夫よ。それより、あなたの言ってた男の事が気になるわ。みんなくなるんでは？違うつて、主役はあくまでシュリなんだから。ちゃんとシュリのプレゼントも買ってあるし。うん、じゃあね。あつ、くれぐれも社長令嬢って事は秘密よ。それじゃ、日曜だね。」

彼女は電話を切ると、ニンマリと笑みを浮かべる。

「シュリの言ってた男達。どんな男が楽しみだわ！ビシッと可愛くしていかないと。でも、主役はシュリなんだから、あまり目立たないようにしなきゃね。お坊っちゃんの手も飽きたし。やっぱり、男はワイルドな感じがいいわ。帰りに着ていく服でも見に行こうかしら？うふふ。」

僕と彼女が再会するまで、あと3日。

僕の日常は、変わり始めようとしていた。

感謝の言葉

昼も過ぎると、客も通り過ぎるようになる。

僕はパーティーの買い物に出掛けようとしていた。

いつもより早く店を閉めようと片付けを始める。

少し忙しかった一日を振り返りながら、額に流れる汗を拭き取っていた。

「あれま、今日はもう終わりなの？」

「すいません、今日はもう終わりなんです。」

近所の人や学生達も残念そうな顔で、店を後にする。

申し訳ない気持ちがつい僕の手を止める。（はあ、せつかく来てもらったのに……。本当に申し訳ないな。もうちょっと頑張ろうかな？）

そうやって、物思いにふけていると、家の中から母が、心配そうに僕に尋ねた。

「ヒョン？どうしたんだい？何かあったのかい？」

「いつもより早く店閉めちゃってるから、何かお客さんに申し訳なくて……。」

「お前も買い物と一緒に行くと言ってたけど、無理しなくてもいいんだよ。」

「……。でも、どうしても行かないと。」

「

母は僕の顔を見ると、ゆつくりと口を開いた。

「もしかして、日曜日のシュリさんの物かい？」

「……。うん。」

「わかったわ。今から行っておいで。お店は母さんがやっておくから。」

「そんなの、駄目だよ！スギヨンにも約束したじゃないか！それに母さんだって疲れてるし……。出来ないよ。スギヨンもとっても

楽しみにしてたし……。言い出したのは、俺だから終わってから夜にでも行けばいいよ。」すると、僕の言葉を聞いた母は、黙って家の中に入り奥の方でござと何かを出していた。

母は引き出しに入っていた一枚の封筒を手に僕の前に戻ってくると、僕の右手を取り封筒と一緒に握りしめた。

「これ持つて行きなさい。」

手渡された封筒は、ギョ又おばさんがくれたお金の入った封筒だった。

「こ、これギョ又おばさんがくれたお金じゃないか！母さん、駄目だよこんな事したら。おばさんに悪いと思わないのか？」

僕は母の行動に少し怒りを感じていた。

そんな僕の表情を感じとったのか、母は僕の右手を握りしめながら話し始めた。

「黙っててもしょうがないから言うよ。ギョ又はね、このお金をお前に渡してくれと言ったんだよ。」

「母さんは父さんのお見舞いのお金だって、言ってたじゃないか！それに、僕のだって言われたってやだよ。貰う理由もない！」

母は僕の言った言葉を聞き、涙ながらに話し始める。

「お前の頑固さは、父さんそっくりだよ。でもね、人間には甘えていい時だってあるんだよ……。ギョ又がお前に渡して欲しいと言ったのは本当なんだよ。いつだって文句一つ言わないで、がむしゃらに働くお前の姿を見て、大学だって途中で辞めて、ろくに遊びにも行かずに毎日毎日働きずめのお前を見たら、誰だって何かしてやりたいと思うよ。母さんだって、本当ならお前を好きだった大学に通わせたい……。でも今はお前に頼らなきゃいけない自分が情けなくて……。封筒の中身は半分はお見舞いのお金、半分はお前の入り用の時に必ず渡してと頼まれたんだよ。だから文句言わないで貰わないと罰が当たるよ。」

僕は涙が止まらなかった。

感謝の気持ちで、胸の中で何回も何回も繰り返していた。

「ありがとう、母さん。僕が悪かったよ、だから泣かないでよ。」

「いいかい、ギョヌには言うなと言われたけど、感謝の気持ちは忘れてはいけないよ。見てくれてる人はいるだから……。」

「ああ、応援してくれてる人達のためにも少しでも頑張らなきゃな！」

「さあ、行っておいで。スギヨンには、私から話ししておくから。」

僕は首にかけたタオルで涙を拭い笑顔で応えた。

「ありがとう、母さん。遅くならないようにするから……。」

僕は封筒をズボンのポケットにしまい込み、街へと走り出した。

そんな僕の後ろ姿を母はいつまでも見送っていた。

僕が最初に向かった先は、街の裏通りにある小さな小物の店だった。僕は店の手前で止まり、人目に隠れながら封筒の中身を数えてみた。

「ひいふうみい……。えっ！こんなに？ギョヌおばさん……。」
中には十五万ウォンも入っていた。

店の月の売り上げの約三分の一。

僕達にとっては、大金である。

封筒を握りしめ溢れ出そうな涙をこらえつつ、店のドアを開ける。

「いらっしや……。ヒョン、ヒョンじゃないか？久しぶりだなあ！元気してたか？」

このお店の主人ミン・スンウオクさん、スンウオクさんは父の友人である。

学生の頃は、思い詰めた時など、ここに来て気を紛らわせに来ていた。

僕の小さな憩いの場でもある。

「スンウオクさん、今日は冷やかしじゃなく買いに来たからね。」

「へえ、ヒョンが買いに来るなんて二年振りくらいじゃないか？ところで、お父さんの調子はどうなんだ？」

「う、うん。元気にしてるよ。母さんが見舞いに行ってるから、大丈夫だよ。スンウオクさん、心配してくれてありがとう。」

おじさんは、どんな話しも聞いてくれる心の広い人だ。

「今日は何を見に来たんだ？」

「友人が誕生日なんで何かあればと思ってね。」

僕は並べてある小物をじっくりと見回した。

「おい、ヒヨン。ちょっとおいで。」

おじさんは、僕をカウンターの奥の方へと呼んだ。

「何、スンウオクさん？」

「これ見てみな。」

スンウオクさんはそう言つて、カウンターの奥から透き通つた小さなクマの置物を取り出した。

「へえ、綺麗だね！どうしたの、これ？」

スンウオクさんは自慢げに話し始める。

「ガラス工房に掘り出し物探しに行ったよ、これが奥の方に眠ってたんだ。これがなかなかどうして、つい買っちゃまってな！何か俺が気に入っちゃつて……。売るのがもつたいなくなつて。」

「スンウオクさんの言う通りすごい綺麗だよ。」

スンウオクさんはクマの置物を眺める僕を見ると静かに喋り始めた。「ウオン、これ買つていけ。安くしてやる！」

「えっ！だって、これはスンウオクさんのお気に入り逸品なんですよ！駄目だよ！」

「確かにそうだが、お前にだったら売つてやる。お前の友達ならきつと大切にするだろうからな。何の迷いもない。まあ、元々売る為に買った物だからな！」

「でも……。」

「俺の気が変わらない内に買つてけ！」

「スンウオクさん、ありがとう。きっと友人も喜んでくれます。」

「よし、いくら出す？」

「これ値段ないの？」

「買い値はあるが、お前の言い値でいい。」

「いくらで買ったの？」

「それは言わない。」

「ん、五万ウオンぐらい？」

スンウオクさんの顔色を伺ってみる。

「わかった、じゃあ五万ウォンだ。ちょっと待ってな！包んでやるから。」

スンウオクさんは、綺麗に包装をし僕に手渡した。

「本当にいいの？」

僕はもう一度だけ聞いてみた。

「嫌なら返せ！」

「いえ、そんなんじゃない！スンウオクさん、本当にありがとう。」

「おう、またいつでもおいで。」

僕は買ったプレゼントを大切に持つと店を後にした。

「ちっ、ウォンの奴十万も値切っていきやがった！」

スンウオクさんは笑みを浮かべ満足そうにしていた。

「プレゼントはこれでいいかな。後は来て行く服だけど……。市場に見に行ってみるか？」

街の表通りを走る。

ある店のショーウィンドウに飾られた服に目が止まる。

「こんな服もいいな……。」「

試しに店の中へと、入ってみる。

色とりどりに飾られた服を手に楽しんで見てみる。

「おっ、これなんかいいかも！えっと、いくらだろ？」

値札を手に取り値段を見た僕は、現実を目にする。

「に、二十九万ウォン！これが……。」「

そつと服を戻し、店を後にする。

ショーウィンドウを横目に僕は再び走り出した。

街の一角にある市場は、安く品揃えも豊富な場所である。少し高い服でも、古着として扱っている店も少なくない。

日常に着る服は目に付くが、イマイチピンとこない。

そんな事ばかりしている間に時間だけが進んでいく。

「もうこんな時間か？早くしなきゃ！」「

気持ちばかり焦って、決まりそうにない。

悩みながら歩く僕の後ろから、誰かが僕の肩を叩いた。

「ドンホン！」

「どうした？悩んでるのか？お前らしくない。」

「ああ、ところでドンホンお前は何してるんだ？」

「友人とちよつと用事があつてさ、その帰りだよ。」

「そうか、そういえばウオンに日曜日話し聞いたか？」

「チラツとな、どこかの社長令嬢の話だろ？ウオンは何か企んでそうな顔つきしてたけど……。」

「あいつ、くだらない事考えてなきやいいが……。」

「お前もしかして、日曜日の為の服見に来たのか？」

「ま、まあな。一応それなりにしないとシユリにも悪いからさ。朝もその事でちよつとあつて……。」

「ふゝん、見つからないもんだから落ち込んでたのか？」

「あんまり予算も無いし、よくよく考えたら俺なんかが見栄張つてもしようがないと思えて来た。まあ飾られた服なんかより、普段の自分の方がしようにあつて。だから、帰ろうとしてたところだ。」

「まあ確かに、お前は飾らない奴だからな……。ヒヨン、ちよつと付き合えよ。」

「あまり時間がないんだけど……。ちよつとならいいぞ。どこか行くのか？」

「まあ、ついて来いって。」

僕はドンホンに言われるがまま、彼の行く方へとついて行つた。

少し街の路地裏へと入ると、目の前に小さな店の看板が目止まる。

「服あります……。ドンホン？ここは服屋なのか？」

ドンホンは僕の言葉を聞き笑みを見せる。

「入ればわかるよ。」

少し戸惑つたが、彼の言われるがまま店の中へと入っていった。

店の中には、見たこともない服がズラリと飾つてある。

だが、値札はついてない。代わりに荷札に名前が書いてある。

「おゝい、テンヨン！いるかぁ？」

店の人だろうか？ドンホンは誰かを呼んでいた。

「ハイ、ちよつと待ってて。あら、ドンホン。服取りに来たの？期日通りにくるのはあなただけよ。」

店の人らしき女性は、店の奥に入り一枚の服を持ってきた。

「はい、これね。間に合わせるの大変だったんだからね。」

「サンキュー！おつ、やつぱり良く出来てるな。ヒョン、どうだ？」

「ああ、良く出来てるな！これ、日曜日に着る服か？」

「ビンゴ！さて、本題に入るか……。テンヨン、ちよつと頼みがあるんだけど……。」「

「何？」

「こいつの服作れないかなあ？明日までに……。」「

「はあ？今のだって大変だったのよ！しかも明日までなんて、はっきり言つて無理よ。」

「ドンホン、俺のはいいよ。店の人も困ってるじゃないか！帰ろう。」

ドンホンは僕の言う事に耳を貸さない。

「なあ、頼むよ。テンヨンちよつと……。」「

ドンホンは店の人の耳元に何かを喋っていた。

話を聞いた店の人は、僕をじつと見つめると口を開いた。

「わかつたわ、でも約束は守つてよ！いいドンホン。」

「じゃあ、決まりだね。」

「あんたこつちにおいで。」

「俺？」

「他に誰がいるの？」

ドンホンは笑みをこぼしていた。

僕は黙つて店の人について行く。

「さて、うちは料金は一律なの。生地はここにある物から選んで。あと形とかは、他のを見て自分で選んでね。特殊な物は追加料金をもらつてるから。いい？」

「はい、すみませんが料金はいくらですか？」

「七万ウォンよ。でもまあ、ドンホンの友人だし最初だから六万ウォンにまけてあげるから。」

「ありがとう、テンヨンさん。」

「まだ出来てないのに、お礼の言葉なんていいのよ。ドンホンの友人にしては、きちんと礼儀を知ってるのね。」

テンヨンさんは笑顔で言った。

サイズ、生地、形が決まり僕はドンホンの元に戻った。

「ドンホン、ありがとう。何とか間に合いそうだ。テンヨンさん、すごくいいひとだな。なあ、さっき何て言って説得したんだ？」

「ん？ああ、あれか？実はな、彼女を食事に誘ったんだ。とびきり旨い店に連れて行くからってな。」

「悪い事しちゃったな。いいのか？」

ドンホンは、僕の耳元で小さな声で喋りだす。

「彼女を食事に誘う口実が出来たんだ。だから気にするな。」

「お、お前！俺を利用したのか？」

ドンホンは僕の顔を見て笑っている。

「何かあった？」

テンヨンさんが店の奥から顔を出す。

「いえ、別に……。」

「服が出来たらドンホンに連絡するから。まあ、明日の夕方ぐらいになると思っておいて。」

「わかりました。それでは、お願いします。」

僕とドンホンは店の外へと出て行った。

「ドンホン！」

「わりい、わりい。でも着ていく服が出来るんだ。良かったな、ヒヨン。」

僕は知っていた。彼なりの優しさなのを……。

本当は感謝の言葉をかけたかった。

でも彼の笑顔は、僕の言いたい事を知っているかのように見えた。僕は、彼と笑い合い感謝の気持ちを表した。

「ドンホン、いつから来てるんだこのお店？それにオーダーメイドにしては、安すぎじゃないのか？」

「彼女は今修業中なんだ。生地は、彼女の両親が作っている残りをもらっているんだ。タダ同然なんだ。最低限のお金をもらって、数をこなしてるんだよ。売れるのは嬉しいけど、彼女は人が喜ぶ顔が見ただけなんだ。いずれはちゃんとした店をするらしいけど、未だに止めれないみたいだな。お前と良く似てるよ。」

「そうか。そんな彼女にお前はぞっこんなんだな。」

「ヒョン、それは言ったら駄目だろ！まあ、100パーセント当たりなだけだな。」

僕達はお互いの顔を見ながら笑いあった。

「もうこんな時間か！すまない、ドンホンそろそろ帰るよ。」

「そうか、じゃあ仕事頑張れよ。テンヨンから電話あったら、連絡するからさ。」

「ああ！じゃあな。」

僕は店に向かって走り出した。

「ドンホン、あんたの言ってた通り私によく似てるわ。初めてね、自分以外の服を作ってくれと言ったのは・・・。」

「そうだったっけ？」

「でも、約束は守ってよ。」

「わかってるよ。テンヨンの作った、一番の服を着ていくからさ。楽しみにしててよ。」

二人は僕の走る後ろ姿をずっと眺めていた。

「ただいま！母さん、遅くなってゴメン。」

「

「おかえり、ヒョン。」

「もう、お兄ちゃん遅い！早く手伝ってよ！」

妹のスギヨンは、少しすねていた。

「ありがとう、スギヨン。おかげで助かったよ。はい、これ母さんと食べておいで。」

僕は途中で買った、団子をスギヨンに渡した。

「団子じゃない！やったー！母さん食べよ。」

スギヨンと母は嬉しそうに食べていた。

（ありがとう。）

僕は心の中で、二人に感謝の言葉を繰り返していた。

夕暮れに染まった空は、いつもよりも綺麗に感じて見えた。

友情と現実

約束の日曜日、朝から慌ただしく準備を始めていた。昨日出来上がった服を着ながら鏡を眺めていた。

襟がキリッとしてよく出来上がっている。

個性的な服は背の高い僕に似合っていた。

僕の部屋のドアをノックし妹が部屋に入ってきた。

妹は目を丸くしながら言った。

「お兄ちゃん凄く似合ってるね。何か見違えちゃった。今日はシュリさんのパーティーの日だね。これなら……。」

「ん、何だ？」

妹の意味しんな言葉が気になる。

「うっん、別に……。何でもない。今日はしっかり頑張ってきてね！」

「頑張る？何の事だ？」

「んもうー！お兄ちゃんて本当にデリカシーってものがないよね。

ほら髪型もしっかりやって！床屋も行けば良かったのに」。でも味があつていい感じかもね。」

妹は何だかせかしていた。

僕は戸惑うが妹はそんな事など気にもしない。

（何なんだ、もう！）

鈍感な僕には妹の考えなど気にも止まらなかった。

約束の時間も近づき、家の先で磨き上げた靴を取り出した。

「じゃあ、行ってくる。母さんがいないから、何かあったら電話しろ。もしも電話に出なかったらギョ又おばさんに言うんだ。おばさんには言つてあるから。わかったな。」

「はい。」

妹は、にやけながら返事を返す。

「なるべく早く帰つて来るからな。」

「お兄ちゃん、行つてらっしゃい！」

妹の見送りを背に僕は家を後にした。

シユリの家までは、歩いて20分程で着く。

彼女の家の近くにはウオンの家もある。

ウオンの家の前に立ち玄関のベルを鳴らす。

「ジリリリ〜ン、ジリリリ〜ン。」

しばらくすると家の奥からウオンの声が聞こえてくる。

「はい、どなたですか？」

「俺、ヒヨンだよ。」

「ヒヨンか！早いな、ちょっと待ってて！」家の奥からドタバタ音がする。

音が消えたかと思っているとウオンがようやく出てきた。

「わりい、わりい。いつものメンバーとはやっぱり違うな、お前の場合。時間前には必ず来るからな！」

「昔はもつと早かったけどな。それでも遅いほうだ。」

ウオンと僕は久しぶりの光景に二人で笑いあった。

「ヒヨン、なかなかいい服着てるな！今日はしっかり決め込んで・

・。お嬢様方に口説かれるんじゃないか？」

「失礼のない格好をしたただだよ。そんなんじゃない。それにお前だつて高そうな服着てるじゃないか？」

「そりゃ、シユリの誕生日パーティーだからな。当たり前だよ！シユリは俺に任せて、お前とドンホンはお嬢様方を頼むな。今日はピシッと決め込んだんだ。」

今日のウオンは気合いが入っている。

何気ない会話をしながら、二人でシユリの家へと向かう。

シユリは、両親がお金持ちなだけあつて豪邸に住んでいる。

家の玄関に立つと更に大きく感じる。

「いつ来てもデカいなシユリの家・・。」ウオンは家を見ながら呟く。

「ほら、シユリが待つてゐるぞ。行こう。」

ウォンの背中を押し玄関のインターホンを鳴らす。

「ピンポン」

「はい、どなた？」

「シュリさんの友人のウォンとヒョンです。」何気ない会話をしながら、二人でシュリの家へと向かう。

シュリは、両親がお金持ちなだけあって豪邸に住んでいる。家の玄関に立つと更に大きく感じる。

「いつ来てもデカいなシュリの家……」

ウォンは家を見ながら呟く。

「ほら、シュリが待つてるぞ。行こう。」

ウォンの背中を押し玄関のインターホンを鳴らす。

「ピンポン」

「はい、どなた？」

「シュリさんの友達でイ・ウォンと連れのキム・ヒョンと言います。」

「ウォンさんとヒョンくんね。今開けるから待ってて。」

シュリの両親はあまり体裁など気にしない人である。

ただ、礼儀には口うるさくしっかりしている。

友達と言う付き合いに関しては、娘のシュリの信頼性を買っていた為、知り合えば優しく接してくれていた。

「まあ、二人とも今日はシュリの為にありがとう。ほら、シュリもお礼を言って！」

シュリの母親の後ろにはドレスアップしたシュリの姿が見えた。

ウォンは目を輝かせシュリを見る。

「凄く綺麗だよ……。間違えちゃった。」

ウォンはシュリの姿に惚れ惚れしている。

「ウォンの言う通りだ。凄く似合ってるよ、そのドレス。」

二人の言葉に、シュリは少し照れながら挨拶をした。

「二人とも今日はありがとう。さあ、家が上がって。」

二人に案内された先は広いリビングだった。

周りには高そうな置物や花瓶などが沢山飾られてある。

大学の時に来た事があるが、いつ来ても驚愕する。

「何か飲む？」

「じゃあ、お願いするよ。」

奥の部屋から紅茶が運ばれてくる。

「どうぞ。あとの二人はもう来ると思うわ。ドンホンは一緒じゃないの？」

「あいつは一人でいいって言うから……。もう来る頃だけなあ。」

「シュリ、ドンホンくんがお見えよ。」

母親がシュリを呼ぶ。

「あつ、はい。来たみたい。」

シュリは立ち上がり玄関へと向かう。

「しかし、ドンホンの奴にはハラハラさせられるよ。ギリギリだもんな。」

「間に合えばいいじゃないか。それに今まで時間を過ぎた事は一度もないじゃないか。」

「まあ、そう言えばそうだけど……。」「

シュリに連れられドンホンがやってくる。

ドンホンもいつもと違ってしっかりとめかし込んで来た。

「うつす。」

「よう、ドンホン。お前もしっかり決めてきたな！」

ウォンはニヤリと笑みを浮かべながら喋り出す。

「やあ、ドンホン。」

三人が揃ってシュリも満足そうに笑っている。

「シュリ、ミンジュさんとスジンさんがお見えになったわよ。」

「はい、二人が来たみたいだから、ちょっと待ってて！」

シュリは慌てて玄関に向かう。

シュリが玄関に向かった後ウォンは小さな声で喋り出す。

「いいか、今日はしっかりと彼女達のハートを掴むんだぞ！あ、シ

ユリは駄目だぞ。あとの二人はお前達に任せる。」

僕とドンホンはあつけらかんと聞いていた。

（そんなのどうでもいいのに・・・。）

楽しんで、喜んでもらおうとしているだけなのにウォンには調子を狂わせられる。

「来た、来た。頼んだぞ。」

顔を逸らしていると、シュリと友人達がリビングに現れる。清楚な格好をした二人はお嬢様らしくまた綺麗に見える。

シュリは二人を前に出し紹介をし出した。

「私の友人のカン・ミンジュさんとユ・スジンさんよ。」

二人は一人づつ自己紹介を始めた。

「カン・ミンジュです。」

おとなしめの雰囲気とする女性に見えるが・・・。

「ユ・スジンです。」

（どこかで聞いた事のある声だ・・・。）

僕と彼女は顔を見上げた瞬間、目線が一直線に合う。

二人は思わず声を出してしまう。

「あゝ！」

二人は声を揃えて驚愕してしまう。

「スジン、どうしたの？二人は知り合い？」

シュリは何気なく聞いている。

「いや、知り合いだなんて。初めてお会いする方よ。」

「そう？じゃあ、今度はあなた達が自己紹介する番よ。」

「イ・ウォンといます。よろしく。」

ウォンは相変わらずの調子。

「カン・ドンホンです。今日はみんなで、シュリのパーティーを盛り上げてあげましょう。」

ドンホンは礼儀をわきまえている。

「キム・ヒョンです。シュリのパーティーに誘っていただいて、嬉しく思います。楽しくやりましょう。」

スジンさんに目線を隠しながら、自己紹介をなんとか終える。

「さて、早速パーティーを始めましょう。」

ドアを開け、シュリの母親が大きなケーキを運んでくる。

「ヒュ、ケーキのお目見えだよ。」

シュリは嬉しそうにケーキの前へと足を運ぶ。

そんな中、僕とスジンはよそよそしく避けていた。

そこにミンジュさんが僕に会話を振ってくる。

「みなさんとても仲がよろしそうですね。」

「ええ、大学の友人なんです。」

「そうなの？シュリが羨ましいわ。」「シュリはいつもこんな素敵な人達と大学行けるんですもの・・・。ねえ、スジン。」

「えっ、ええそうね。本当羨ましいわ。」

（まさかあの男がいるとは！知ってたら断ったのに！）
スジンは少し苦笑い。

「そんな事ないですよ。」

（くそ、カエル女が来るなんて。何てついてない。この場はとりあえず適当にあしらう事にしよう。）

僕は余分な事はあまり喋らないように心掛ける。

「さあ、シュリ。ロウソクを消して！」ウオンの掛け声と共に、僕等は手拍子をかけ始める。

「せーの！」

みんなの掛け声と共にシュリがカ一杯息を吹きかけロウソクの火を消し去る。

「シュリ、誕生日おめでとう。」

みんなの祝福の声にシュリは満面の笑顔を振りまいていた。祝福の言葉に続いて、持ってきたプレゼントを渡し始める。

「おめでとう、シュリ。」

ミンジュとスジンの二人はそれぞれ持って来た物をシュリに渡す。

「ありがとう、ミンジュ、スジン。開けていい？」

「ええ、いいわよ。」

シュリは綺麗に包装されたプレゼントを開ける。

一つは可愛いらしいブローチ、もう一つは綺麗に編み上げであるバツグだった。

「これ前から欲しかったんだ。嬉しい！」

二人からのプレゼントはどこから見てもブランド物に間違いない事は僕が見てもわかった。

そんな事など気にも止めずウォンは、自分の持って来たプレゼントをシュリに差し出した。

「シュリ、誕生日おめでとう。これ俺が一生懸命考えて探して見つけたんだ。」

「ありがとう。開けてもいい？」

シュリはゆっくりとプレゼントを開ける。

「わあ、綺麗。星のビーズのネックレスね！」

小さく散りばめられたビーズは宝石状に形どられ綺麗な星を彩っている。

「気に入って貰えて嬉しいよ。」

ウォンは少し照れ臭そうに言った。

それを見た、ミンジュとスジンは後ろでこそこそ話をする。

「シュリの気になってる人は、あの人かな？」

ミンジュの言葉にスジンが応える。

「でもシュリの感じが違うわ。話聞いた時とても恥ずかしそうだったし。」

次にプレゼントを差し出したのはドンホンだ。

「シュリ、おめでとう。何にしようか悩んだんだけど、やっぱりこれかなって、思ってた。」

シュリが箱の中を開けて見ると、ストライプ模様のスニーカーが入っていた。

「可愛い、ありがとう！大事に履くね。」

他にはない、たった一つのオリジナル。プレゼントの温かみはこうしたことが必然的に嬉しい。

ミンジユとスジンは鼻の下を伸ばしながら覗き込んでいた。
(ふゝん、なゝんだ大したことないわ。)

スジンはプレゼントを見ながらけなしていたが、本当は心の中で羨ましく感じている自分には気づいていない。

「ねえ、スジン。スジンったら！」

「あつ、な、何？」

ミンジユは心配そうに話しかける。

「スジン、どうしたの？ぼくとして・・・。」

「な、何でもないよ。」

「ならいいけど。ねえ、シュリの言ってた人、あの人かな？」

ミンジユの言葉を聞き、スジンはドンホンをチラッと見ながら首をかしげて言う。

「違うんじゃない。何か彼って感じじゃないよ。」

陰で二人がどうこう喋っている時、僕の順番が回ってくる。

「シュリ、誕生日おめでとう。大した物じゃないけど・・・。」

僕はポケットから小さな箱をシュリに渡した。

シュリの頬がほんのり赤く染まる。

「あ、ありがとう。開けてもいい？」

「もちろん！あまり期待しないでよ。」

シュリがゆっくり箱を開けると、小さな眩いクマのガラス細工が姿を現す。

シュリはそつと箱から取り出し、透かしながら眺めていた。

「仕事であまり時間が無かったから・・・。大した物じゃなくてごめんな。」

僕は正直に話しかける。

シュリは僕の言葉に気づいていない。

「シュ、シュリ。」

シュリはいきなり振り返って、満面の笑みをこぼして言った。

「ヒョンくん！ありがとう、大切にするね！」

「あ、ああ。喜んでもらえたなら、嬉しいよ。」
僕は戸惑いながら応えた。

何かわからないが、かつてない不安が僕の心を揺さぶる。
そんな光景を見ていたのは紛れもない、周りにいるみんなだったからだ。

「スジン、シュリの言ってた人。あの人に間違いないわ！シュリの喜びよう尋常なないわ、どうみても……。」

「そ、そうみたいね。」

（シュリもよりによって、何であいつなのかしら？あんなのどこがいいのかしら！へんな子……。）スジンはシュリが僕のプレゼントをじつと眺める姿に、嫉妬を感じ始めていた。

プレゼントを渡し終え、振り返る僕の目につつむいたウオンの姿が飛び込んだ。

「おい、ウオン？どうかしたのか？」

ウオンはハツと我に振り返り喋り始める。

「ああ、何でもない。それより早くみんなでパーティー始めようぜ！」

その時はあまり気にしなかったが、このパーティーの終わってから、ウオンとの距離が少しずつ離れていく事になるとは僕は知らずにいた。

パーティーも盛り上がり刻々と時間が過ぎていった。

時折、時間を気にしながら僕は一緒になつてはしゃいでいた。

少しその場を離れ窓際で時計を見ていた。

スジンは僕の仕草に気づき、そつと歩み寄る。

「ヒョンさん、何か用事でも？」

彼女の言葉にハツと振り返る。

「い、いえ……。ああ、スジンさんか？」

「まあ！何その言い方。ちよつと、失礼でしょ！」

「そんなに怒らないでください。今日はシュリの誕生パーティーだから、もめ事は止めましょう。ところで、あの日は風邪など引かず

に大丈夫でしたか？」

彼女は突然の僕の言葉に戸惑いながら応える。

「えっ？ええ、おかげ様で。」

「そうですね、良かったです。あの後ちよつと言い過ぎたと思って反省してたんです。店の事の前にあなたが濡れていた事に気を使わなかった事に……。危うくシュリの友人に風邪を引かせてしまうところでした。すいませんでした。」

僕は頭を下げる。

「もう止めましょう。こうしてパーティーに来ているんだから、楽しみましょう。ねっ！」

スジンのちよつとした仕草に温かさを感じる。

「でも、もう帰らないと。妹が一人で待ってるから……。」
僕は静かに頭を下げ、シュリの元へと歩き出す。

「シュリ、ごめん。もう帰らないといけないんだ。」

シュリは寂しそうな顔をするが、笑顔で応えてくれる。

「妹さんが待つてるんでしょ。仕方ないよね……。今日はありがとう。」

「ごめん。じゃあ帰るよ。ウォン、ドンホンごめんな。」

「しょうがないんだろ。早く帰ってやれ。」

ドンホンも笑顔で送る。

「じゃあないよな、妹も大事、パンも焼かないと食っていけないしなあ！そんなに忙しいなら最初から断れよ。」

ウォンは嫌みを言い出した。

「おい！ウォン、言い過ぎたぞ。」

ドンホンは声を高らげる

「ウォンくん！言い過ぎでしょ。ヒョン、気にしないで。」

ウォンの言葉が胸を突き刺すが、本当の事に何も言えない。

先ほどの僕の不安は的中していた。

ウォンはシュリの気持ちに気づいてしまった。

今日のシュリの態度は、ウォンに決定づかせたのだ。

ウォンはそんな僕を見て面白くなくなるのは当然だ。

我慢していた言葉もシユリの事を思えば、出て来たのだろう。
自分の哀れさに思わず拳を握りしめる。

そんな僕の姿をスジンはじっと見つめていた。

僕は黙ったまま頭を下げ、家を飛び出した。

悔しさが僕のまぶたを重くする。

ひたすら妹の待つ家を目指し走った。

家の前では妹が掃除をしていた。

僕の姿を見つけ、大きく手を振る。

「お兄ちゃん、お帰り〜。早かったね、パーティー面白かった？シユリおねえちゃん喜んでた？」

妹のけなげな言葉に我慢してたものがこみ上げてくる。

「どうしたの？何かあったの？」

妹を抱き寄せ僕は小さな涙を流す。

「痛いよ〜、お兄ちゃん。」

溢れ出る涙を必死に隠し妹に言う。

「お兄ちゃん、頑張るからな！スギョン、お前も頑張るんだぞ。」

「もう、わかったからいい加減はなしてよ。痛い！」

「ああ、すまない。」

僕は涙をそっと拭い、笑顔で喋った。

「へえ〜、掃除なんて珍しいな。」

「やるときには私だってやるわよ！」

そんな会話が続き妹と僕は時間を忘れて掃除に没頭していた。
家族の絆を確かめ合うかのように・・・。

赤な嘘

夕暮れの景色が空を染める頃、閑静な住宅街が並ぶ坂を一人の女性が歩いていった。

スジンである。

大きな門のある家の表玄関を開き中へと入っていった。

「ただいま。」

スジンが玄関を開けると、家の奥から彼女の母親が出迎えに来た。

「おかえり、スジン。あなた、どうやって帰ってきたの？連絡すれば迎えに行かせたのに。」

「ごめんなさい、心配かけて。ちょっと歩きたかったから・・・。」

「もう、まだ嫁入り前の体なんだから、交通事故にでもあったら心配するでしょ！なるべく、迎えに行かせて頂戴。」

母親は眉をしかめながら話した。

「お母さん、嫁入りなんてまだ早いわよ。私はまだ大学生なんだから。」

「嫁入り前には変わらないわ。それに、お父様がその事であなたにお話があるそうよ。」

スジンは目を丸くする。

「えっ、何？もしかして、私にお嫁に行けとでも言うの？」

「私もよく知らないのよ。仕事から帰ったら話しをしたいから、あなたに家に居るようにと釘を刺していったわ。」

スジンは困った顔で、動揺を隠せない。

「シユリさんのパーティーどうでしたの？」

「えっ、ええとても喜んでいました。」

「シユリさんのお父様とは付き合いが深いようだから、粗相のないようにね。」

「はい、お母さん。」

母が振り返った後ろ姿をスジンは寂しげに見つめていた。

スジンは部屋に入り、ベッドへ身を預ける。
シックな家具が並ぶ彼女の部屋の片隅には一枚の写真が飾られてある。

幼い女の子と一人の女性、そして父親とのスナップ写真である。
幼い女の子はスジン、一緒に写っている女性は彼女の本当の母親である。

彼女が14才の時に病気で亡くなってしまった。

今の母親は、三年前に父親の知人紹介で知り合った人だった。

今の母親と結婚するのに、時間はかからなかった。

結婚してすぐに男の子が生まれたが、交通事故に遭い帰らぬ子となつてしまった。

事故以来、父親と母親はお互いにギクシャクしたまま暮らしている。
夜遅く母親のすすり泣く声が聞こえる日も少なくはなかった。

スジンは飾つてあるスナップ写真を手に取り写真の中の母親をじつと見つめていた。

（お母さん・・・、私どうしたらいいの？）

小さな頬を涙がつたう。

写真を抱きしめながら、いつしか彼女は眠りについていた。

「スジン、スジン！」

母親の呼ぶ声にようやく目を醒ます。

「はい、お母さん。」

スジンはベッドから起き上がると写真を元の位置に戻し髪を撫でながら部屋を出る。

「お母さん、何かご用でしたか？」

「お父様がおかえりになったわ。呼んでらっしゃるから、お部屋に行きなさい。」

「わかりました。」

スジンは父親の部屋へと向かいドアをノックする。

「お父様、スジンです。」

「ああ、スジンかい？入っておいで。」

スジンはゆっくりドアを開き部屋の中へと入っていった。

「まあ、座りなさい。」

父親はスジンの顔を眺め目を細めている。

「お父様、お話しというのは・・・。」

父親はスジンを見つめ口を開き始める。

「実はお前に縁談がある。相手はＩＴ会社の社長の息子さんだ。お前の話しをしたら是非と言ってきた。」

スジンは困惑した顔で応える。

「お父様、私はまだ大学生です。それに、結婚なんてまだ・・・。」

「確かにまだ早いかもしれないが、悪い話でもないだろう。嫌なら直ぐにとは言わない。付き合ってみたらどうだ？答えはそれからでもいいだろう。私はお前の母親と約束したんだよ。お前が幸せになれるようにすると。」

「で、でも。」

「何か断る理由があるのか？」

思い詰めていた彼女は突然口を開き、ある言葉を口に出した。

「わ、私付き合ってる人がいます。」

スジンの言葉に父親は愕然とする。

「誰だ、その男は？」

父親の言葉が家中にこだまする。

父親の言葉を聞きつけた母親が駆けつけ、何とも言えない雰囲気が漂い始めた。

「なんて名前の男だ！」

「キ、キム・ヒョンていう方です。」

父親は息を切らしながらソファに倒れ込む。

（ああ、どうしよう。よりによってあいつの名前出しちゃった。）
彼女の嘘から再び出逢う事になるとは、知るよしもない僕の姿があの店にあった。

部屋に戻った彼女はベッドになだれ込んだ。

「どうしよう？どうしたらいい？あゝん、私ったら馬鹿馬鹿！よりによって、アイツの名前出して、どうするのよ！」

彼女は顔をベッドにうずめしばらく考え込む。

「悔やんだって、しょうがないわ！どうにかしなきゃ。そうだ、シユリに……。いや、駄目だわ。あの娘アイツの事が好きだったんだ！うゝん……。そ、そうだ！ミンジュに頼んでみよう。」

彼女は携帯を手に取りミンジュに電話をかけた。

「あ、ミンジュ！今日は楽しかったね。実はね、ちよつと相談があるんだけど……。」

彼女は今までのいきさつをミンジュに話した。

「何言ってるのよ！知らないわ、それに何で断るの！いい話じゃない？」

「どうしても嫌なの。お願い……。」

ミンジュはしばらく黙っていた。

「わかったわ。でも、断る理由を聞かないと手伝わないわ。」「えゝ、ミンジュには関係ない話よ！」

「じゃあ、無かった話よね。」

「ちよ、ちよつと待って！わかったわ、言うから……。」

スジンは表情を変えゆっくりと話し始める。

「私がまだ幼い頃の話になるわ。そうね、ちょうど今頃の季節だった。友達と遊んで、帰りが遅くなったの。路地裏を歩いてたら、雨が降り出して……。近くにあった店陰で雨宿りしてたの。雨空を眺めて、ふと気が付くと、一人の男の子が反対側に同じように雨宿りしてたの。」

その男の子と目が合ったら、とても恥ずかしそうにしていたわ。寂しくなりかけていた私は、何となく喋りかけたの。

すると、その男の子は私の話を素直に聞いてくれたわ。ずっと、私の話を聞いていた男の子が微笑みかけた時に、私の胸が突然、高鳴り出したの。今まで、感じた事のない気持ちに戸惑ってはいたけど。

しばらくして、私の母親が迎えに来てくれたけど、私は見えなくなるまで、ずっとその子に何度も振り返りながら手を振っていた。あの日の事が今でも忘れられない。何故だかわからないけどその時に出逢った人にもう一度逢えるような気がして……。」

「へえ、何か凄いロマンチックな話しね。」

「私、どうしても逢いたい。無理かもしれないけど……。でも、今はどうしても嫌なの。お願い……。ミンジュ。」

「しょうがない、手を貸しますか！見つかるといいわね、その初恋の人。」

「初恋の人？ミンジュそんなんじゃ……。でも、ありがとう！この恩は絶対に忘れないから。」

スジンはホツとし胸を押さえる。

「ところで、シュリには何て言うつもりなの？あの娘、ヒョンさんの事が好きなんじゃあ……。」

「そうよね、でもちゃんと理由を話せばわかってくれると思うわ。」

それにヒョンさんには、少しの間お願いするだけよ。」

（でも、どうやってアイツに頼もうかな……。話せばわかってもらえそうだけど。理由を考えないといけないわね。）

スジンのカバンにかかったあの御守りは二人の再会を待っていたかのように、真っ赤な輝きを放っていた。

そんなスジンの思惑を知らないヒョンは、妹のスギョンと共に母親の帰りを待っていた。

「お母さん、まだかな？」

妹のスギョンは心配そうに僕に話しかける。

「いつもよりまだ時間も早い。大丈夫、もう帰ってくるよ。」「でも、何か最近お母さんの帰りが遅くなってきたくない？それに病院に行く回数も増えたし……。お兄ちゃん何か聞いてない？」

「い、いや何も……。母さんもお父さんが心配で一緒にいたいだけだろ。」

「そう・・・、それならいいんだけど。」

「父さんの事は、俺達に任せて、お前は学校を卒業する事に専念しないと。父さんに怒られるぞ。」

「お兄ちゃんに言われなくてもちゃんと、勉強はしてます。」

スギヨンはふくれていたが、僕はそんな妹の仕草に笑みを浮かべていた。

妹はそんな僕を見て、無視するかのように母の帰りを待っていた。

「あつ、帰って来た。お兄ちゃん、お母さんが帰って来たよ。」スギヨンは子供のようにはしゃぎながら母さんの元へと駆け寄った。

二人の睦まじい光景に、僕はある決意を固める。

（自分を犠牲にしても、二人は必ず守ってみせる。）

今日のシユリのパーティーで自分と言う存在を改めて知った。

人にはそれぞれの道があるという事を・・・。

それが何を意味しているかも・・・。

恋人契約

次の日の朝、何一つ変わらない朝を迎えていた。

いつものように僕は店の奥でパンの生地を練り上げていた。

昨日のウオンの一言がまだ心を揺さぶっていた。

シュリの誕生パーティーを誰よりも心待ちにしていたのは、ウオンだ。

（大丈夫、朝来たらウオンと話し合えばいい。今までもそうだったじゃないか。）

自分に言い聞かせながら彼らが来る時間を待っていた。

壁に掛かった古びた時計を何度も見ていた。

（いつもならもう来る頃なのに……。遅いな。）

刻々と時間だけが過ぎていく。

（来ないな……。寝坊でもしたのか？）

ようやく道先にシュリとドンホンの姿を見かける。

「やあ、シュリにドンホン！おはよう。ウオンは？」

「ウオンくんは……。」

シュリは下を向きそれ以上は喋らなかった。

見かねたドンホンは、真剣な顔をして話し始めた。

「ウオンは多分来ないよ。」

ドンホンの言葉を聞いたシュリは、走り出した。

「おい、シュリ！なあ、ドンホン一体何があったんだ。ウオンがもう来ないって……。どういうことだ？」

ドンホンは僕を見つめ、険しい顔つきで話し始めた。

「シュリのパーティーでお前がいなくなった後、シュリが少し落ち込んでいたんだ。ウオンは何とか盛り上げようと頑張っていたよ。

そんなウオンの姿を見て俺も頑張っていたが、来ていた他の二人もシュリの事が気になって、色々気を使っていたけど……。シュリは空元気な感じで……。そんな姿を見たウオンは元気を無くして

しまっていた。」

ドンホンは、眉間にシワをよせながら僕に話を振ってきた。

「ヒョン、正直に言うけど本当は、シユリはお前の事が好きなんじゃないのか？」

「えっ……。何故そう思うんだ？」

「シユリがお前を見ている時の仕草はちょっと違うから……。それにこの前店に行った時だって、真剣な眼差しでお前を見てたしな。だから遠慮して、店を出たんだ。」

「……。」

「思い当たる所があるだろ？シユリの事どうする気だ？」

「どうするもない。ただの友達だよ。」

「それで、すまない話だろ。ウォンは男らしくパーティーの後シユリに告白をしたんだぞ！」

「ウォンが告白したのか？」

「ああ、朝、シユリの様子がおかしかっただろ？ウォンの話をしたら、サツと行ってしまったのが何よりの証拠だよ。」

「返事はもらえたのか？」「シユリは好きな人がいると言って断つたみたいだ。」

「そ、そうか……。」

僕は愕然とする。

ウォンの気持ちに気づいて、どうにかシユリと一緒にしようとしていた。

。

「ドンホン、シユリの好きな人ってもしかして……。俺なのか？」

「……。多分な。見ればわかる。」

僕はそれ以上の言葉が見つからない。

「ウォンはシヨックだったんだろう。あれだけ想いを寄せてたからな……。」

「……。」

「ヒョン、誰か好きな人はいるのか？」

「・・・。」

「いるんだな？誰だ？」

「まだ言えない・・・。」

僕は一瞬空を見上げ、ため息を吐いた。

「そうか・・・。喋りたくなければこれ以上は聞かないよ。だが、シユリはどうするんだ？」

「シユリは好きだけど、友達以上にはなれない。」

「シユリはウオンに告白された事で、ショックを受けただろうから・・・。」それはウオンも同じだろ！俺だってどうしていったらいいかわからないよ！」

ドンホンは、僕の凄じ剣幕に驚いていた。

「ゴメン、そんなに怒るとは思ってなかった。」

「いや、俺の方こそついカツとなってしまうて・・・。ゴメン。」しばらく二人の沈黙が続く。

「ドンホン、すまないがウオンの様子を見ておいてくれないか？」

「ああ、わかった。シユリはどうする？」

「シユリも気になるが、顔を見せないウオンの方が心配だ。何かあったら連絡をくれないか？」

「また、連絡するよ。もう行かなきゃ、じゃあな。」

ドンホンは、大学へと向かった。

ウオンの事が気になるが、店を空ける事は出来ない。

今頼れるのはドンホンだけ。

ウオンとシユリは、このままでは一緒にはいられないかもしれないふと頭をそんな事が頭の中を繰り返しよぎる。大抵の人は、好きな人とは友達にはなれないと言うが・・・。

仕事の方も二人の事が気になり、手につかない。

苛立っている僕の前に、一人の女性客が訪れる。

「あのう・・・、ヒヨンさん。」

「あつ、はい！いらつしゃ・・・。ああ、スジンさん。何かご要ですか？」

（この苛立つてる時に何しに来たんだ？）

スジンは一瞬顔をこわばらさせるが、笑顔で話しかけて来た。

「お店忙しそうですね。」

「・・・。」「いい匂い。わぁ！このパン美味しそう！何て言うパンなんです？」

「買わないのなら、触らないで下さいね。売り物なんで！」

（くぅ！憎たらしい！聞いてるだけじゃない。）

「ひ、一つ下さい。」

「・・・。」

僕は黙ってパンを一つ取り紙袋に入れる。

「二百ウォンです。」

「あつ、はい。」

スジンはお金を取り出し渡した。

僕はパンを手渡すと無視するかのように仕事に励み出す。

（ホント、無愛想な人ね。でも、何とかしないと・・・。）

「あのう・・・、ヒョンさん？」

僕は振り返りもせず、返事を言う。

「まだ、何か？」

スジンはヒョンの後ろ姿に少しためらいながら話し始めた。

「失礼を承知で、お聞きします。ヒョンさん・・・、今付き合っている方はおられますか？」

「ブツ！？」と、突然何ですか！そんな事あなたには関係ないでしょう。」

（当然、いないわよね。シュリもホント、物好きね・・・。）

「お話があるんですけど・・・。よろしいですか？」

（何なんだ急に。もしかして、カエル女の奴俺の事が・・・。いや、とんでもない。絶対嫌だ。）

「な、何ですか？」

スジンは僕の顔をじっと見つめる。

僕は彼女の眼差しに一瞬目を奪われてしまう。

（いかん、いかん。何考えてるんだ。）

「実はお願いがありまして……。」

僕はその言葉を聞きホツとする。

「何ですか？」

僕は、カウンターにある水の入ったコップを手にとりを飲む。

「あのう……、何て言うか、そのヒョンさんに私の彼氏になって頂きたいんです！」

僕は飲みかけた水を思わず吐き出した。

「な、何て言いました？」

スジンは大きな声でもう一度はつきりと言う。

「ヒョンさんに私の彼氏になってもらいたいです。」

僕は驚きのあまり頭が真っ白になる。

「あ、あのう、スジンさん？まだ逢って間もないあなたと付き合うという事ですか？」

スジンは僕に笑顔で応える。

（好きで頼んでいる訳じゃないのよ。）

「悪いけど、出来ません。」

「えっ！」

（こ、この私を振るつていうの、この人！）

「俺はあなたの事を知らないし、好きでもない。何故言ったのかわからないけど、僕なんかよりもっといい人がいる筈です。すみませんが聞かなかったことにします。お引き取りを。」

僕はその場を立ち去ろうとする。

スジンは少し考え込み、僕を引き止める。

「待って！理由を話すから。」

僕は立ち止まり、スジンの話しに耳を傾ける。

「父親に強引に見合いをさせられそうなの。でも、私はそんな事が嫌で……。私に彼氏がいるとわかれば諦めてくれると思って。」

「そんなような事だと思ったよ。なら尚更駄目だね！諦めてくれ。」

「も、もう父に言ったのよ。ヒョンさんと付き合ってるって！」

僕は顔をしかめる。

「はあ、何だつて？」

「しょ、しょうがなかったのよ。他に名前が思い浮かばなくて……、つい。」

「何考えてるんだ？有りもしない事を父親に言うなんて！あなたの頭の中がどうなってるのか、見てみたいね！」

「あきれちゃうわ。いまだ彼女もいないのに、私みたいな綺麗な女と付き合えるんだからいいじゃない！」

「もういい！とっとと帰ってくれ！」

（くう、本当に憎らしい！もういいわ！何とかしよう！時間のムダだわ。）

「わかったわ。帰ります、帰ればいいんでしょ！フン！」

スジンは膨れっ面で店を出る。

僕もあまりの腹ただしさに持っていたコップを投げかけた。

（待てよ……。仮に彼女と嘘の付き合いをすれば、シユリも僕を諦めてウオンと仲良くやれるかもしれない……。どうする？）

僕は迷いながらもスジンの後を追う。

「あ、あ、どうしよう？でも、あいつなんかとは絶対嫌だし……。他に誰か似たような名前の人いたかな？」

スジンは一人愚痴りながら歩いていた。

「おい、カエ……。スジンさん。ちょっと待って。」

「ん？どうかしましたか……。？もう話す事なんかありませんけど！」

スジンは膨れっ面のまま相手にしようとしなない。

「先ほどの話受けてもいいですよ。」

スジンは顔色を変え笑みを浮かべる。

（ほら、やっぱり私の魅力に気付いたのね。）

「まあ、あなたがいいって言うのなら付き合ってもいいわ。」

（このカエル女、どこまで人をコケにするのかな？まあいい。）
「条件があります。」

「何よ条件つて？」

「スジンさんは僕がいる事で父親からのお見合いの話を断りたいんですよね？だったら、僕も同じようにある女性に僕への想いを諦めてもらいたいんです。知ってますよね、シユリの友人なんですから。」

「えっ、シユリを騙すの？私が？」

（ええ！シユリには後で説明しようと思ってたのに……。これじゃ、横取りしたと思われるじゃないのよ！どうしよう……。でも、シユリには名前まで聞いてないし誰だかわからないのも事実だわ。しばらくして、用済みになったら別れば問題無いし……。）

「わ、わかったわ！シユリに諦めてもらえばいいんでしょ！そのかわり私の方もちゃんと肩をつけるまで付き合ってもらうわ。」「ああ、わかった。じゃあ、契約書を書いておこう。」

「契約書？」

「お互いの目的を達成したら別れるという契約書だよ。それに、条件もいくつか書いておきませんか？」

（まあ、スカポンタンにはいいこと言うわね。その方が、後腐れないわ。）

「いいわ、そうしましょう。」

僕とスジンは店に戻り、お互いの条件を言い合う。

「一つ、お互いのプライベートな事には干渉しない。一つ、お互いの仕事及び学業の邪魔はしない。一つ、必要以外は電話しない。一つ、契約中は如何なる事があってもお互いを好きにはならない。一つ、お互いの目的が達成された時別れるものとする。以上が誓約条件だ。」

二人はお互いにサインをした紙を受け取った。

「今から俺達は恋人同士だ。」

「ええ、恋人同士よ。」

二人はにらみ合いながら立ち上がるとお互い握手をした。

「じゃあ、私はこれで帰るわ。」

「・・・。」

「あなたね・・・、恋人が帰るのに何にも言わないつもりなの？」

「そうだね、お疲れ様。」

「くっ！帰るわ！」

スジンは怒りながら店を出て行った。

僕は一人不安を抱えながらもウオンとシユリの事を考えていた。

「もう！やんなくなってきた！あんな奴、初めてだわ。」

スジンはカリカリしながら、歩いていく。

「プルルル、プルルル。」

スジンの電話が鳴り響く。

スジンはバッグから携帯を取り出し、電話に出る。

「もしもし、あっ！ミンジュ？どうなったって、アイツ・・・ヒョ

ンさんが断る訳ないじゃない。相手はこの私よ。うん、また後でね、

じゃあ。」

（すっかり忘れてたわ。ミンジュには言っておかないと、後で困るわ。）

スジンは空を見上げ、歩き出した。

彼女は赤い御守りの輝きが増している事には気付いていない。

二人の距離はこうして近づき始めた。

携帯電話を持たない男

あれから、ドンホンからの連絡は無い。

（ウォン・・・、誤解だけはしないでくれ。）

僕は何度も心の中で祈っていた。

ポケットから契約書を取り出し、何度も読み返した。

ウォンには幾度となく助けられてきた。

こんな形で友情が崩れるのは、本位ではない。

例え、嘘付き呼ばわりしてもウォンへの恩返しだけはしたかった。
シユリには悪いが・・・。

そんな自分の想いを胸に、ひたすら仕事に励んでいた。

スジンはミンジュと逢っていた。

あるカフェの店内で二人はひそひそ喋っている。

「恋人契約!？」

ミンジュの声が店内に響き渡る。

「ちょ、ちよつと!声が大きいよ!」

ミンジュは呆れながら喋り始める。

「スジン、あなた電話では偉そうな事言ってたけど、恋人契約なんて・・・。大丈夫なの?バレたりしたらそれこそおしまいよ。」

スジンは仕方なそうな顔付きで話し始める。

「私だって、嫌よ。あんな奴!でも、他に方法がなかったし・・・。大体あの人、信じられないわ!私を拒んだのよ!自分から言ったのも初めてなのに・・・。思い出しただけで腹が立つわ!」

スジンはコップに入った、アイステイーを一気に飲み干した。

「ふゝん、あなたが振られるなんて、今まで無かったからね。ましてや、初告白で振られるなんて・・・。ヒョンさんだっけ?感覚が鈍そうね。」

「ミンジュもそう思うでしょ!振った事があっても振られるなんて、

今回みたいな形でも許せないわ！」

スジンは怒りをあらわにする。

「シユリには言ったの？」

スジンは顔色を変え事情を話し出した。

「ええっ！？ あの人シユリを諦めさせたいの！何で？」

「わからない。契約書通りプライベートな事は聞けないから……。でも、あの人も馬鹿ね。シユリは綺麗で可愛いし性格も優しいのに。まあ、私ほどでは無いけど！」

ミンジユは呆れ返りながら喋り続ける。

「変な人ね。自分にはいい条件入ってくるっていうのに。でも、あの人が良く見ればなかなかのイケメンよね。恋人契約でもいいかも！」

「まあ、呆れた！何言ってるのよ！あんな人のどこがいいの？」

「ねえ、その契約終わる頃になったら、ヒョンさんと私が付き合ってみたいな。」

ミンジユは目を輝かせながらスジンに言った。

「あなたも物好きね。好きにしたら。それよりシユリには何て言ったらいい？」

「どうしようかな？ん、とりあえず様子を見て、早く終われば言わずに済むかもね。見つかったからでも、ちゃんと説明すればわかって貰えるわよ。」

「そうかな？でも、あなたさっきあいつの事いいって言ってたじゃない！」

「あれは……。冗談よ、冗談。だって、よくよく考えたらシユリの好きな人なんですよ。出来ないわ。」

「そういう風に言われると、私の立場が無いじゃない……。うん、ちよつと強がって言ったけど、シユリにはやっぱり申し訳ない気がする……。はあ、何か不安だね。」

「今更後悔してもしょうがないでしょ！もう契約書にサインしたんだし。出来るだけ協力はするから。何とか、お父様を言いくるめる事を考えて！」

「うん……。はあ、本当に大丈夫かしら。」

「ねえ、一つ気になってたんだけど？」

「何？」

「契約書だから、二人の内どちらかが、もし契約違反なんてしたらどうなるの？」

「契約違反？それは、この裏に書いてあるわ。」

スジンは契約書をひっくり返し、ミンジュに見せた。

「え」と、二人で定めた契約内容を違反した場合には、罰金として三千万ウォンを支払い、又お互いはその時から一生逢わないものとする。ス、スジン三千万ウォンって……。ちよつと大丈夫？」

「色々話してたら、勢いでつい……。」

「お父様に見つかったらタダじゃ済まないわよ。」

「わ、わかつてるわよ。問題はシュリをどうごまかすかに掛かってるんだから！ミンジュお願いね、ね！」

強がって見せるスジンの心の中は不安だらけ。

スジンの父親の一言が二人を更に厳しくさせる事になるとはお互い知るよしも無かった。

その頃、ヒョンは電話に出ていた。

「ドンホンか？ウォンの様子はどうだった？そ、そうか……。又何かあったら教えてくれ。ああ、わかった。済まないな。じゃあまた……。」

ウォンは大学には行っていないみたいだった。

受話器を置き立ち止まりながら、ウォンに電話をしようかためらっていた。

僕はゆっくりと受話器を上げ、ウォンに電話をかけてみる。

「プルルル、プルルル、プルルル、ガチャ。只今電話に出る事が出来ません。ピーーと言う発信音の後にメッセージをどうぞ。ピーー！」

（留守電……）

「ウォン、俺だ。ドンホンから聞いたよ。大学にも行っていないみた

いだから心配で電話したんだ。又落ち着いたら、店に顔でも見せに来てくれ。待ってるからな。ガチャ！」

僕の心にはぼつかりと穴があいたような感じがしていた。昼も近くなり客足が店を訪れ始める。

忙しい中でもどこかやりきれない気持ちで僕を苦しめていた。

忙しい時間帯を乗り切った時にはいつもより倍以上の疲れを感じていた。

店を閉め少し休む事にする。

椅子にもたれながら、電話が鳴る事を祈っていた。

(ウォン・・・)

カウンターの先にコップを取りに行こうと立ち上がった時、店のドア越しにシュリの姿を見つける。

シュリは、思い詰めた顔付きで佇んでいたがすぐにドアから離れて行った。

僕は慌てて店のドアを開け、シュリに声を掛ける。

「シュリ、どうした？」

シュリは黙ったまま立ち去ろうとしたが、僕の顔を見るとうつむいたまま近寄って来た。

「ちよつと疲れ気味で、店閉めて休んでたんだ。何かあったのか？」

「・・・。」

シュリは黙ったままだ。

「店に入るか？何にも無いが、お茶ぐらいなら出せるぞ。」

シュリは顔を上げると店の中へと入って来た。

「はい、どうぞ。」

「ありがとう・・・。」

「何か食べるか？」

シュリは黙って首を横に振る。

僕はウォンの話をシュリに切り出してみた。

「シュリ、ウォンの事で悩んでいるのか？」

シュリは僕の顔を見つめると首を縦に振り話し始めた。

「私、わからないの。ウォンくんのことどう思っているのか……。ずっと友達だとばかり思ってたから……。」

シユリは戸惑っていた。

「友達でも男と女なんだから、感情が出るのは当たり前だよ。」

「男と女……。ヒョンくんは、私の事友達として見てるの？それとも……。」

シユリは僕をじっと見つめる。

僕は目線をそらせ、立ち上がる。

「シユリ、大学でウォンを見かけなかったか？」

僕は慌てて、話題を変える。

「ヒョンくん、答えて！」

シユリの声が店の中にこだまする。

「お、俺は……。」

僕が答えようとした瞬間、突然店のドアが開き一人の女性が入ってくる。

「ちよつと！電話番号ぐらい教え……。て。あぁっ!？」

スジンとシユリの目線がピッタリと合い二人は驚いていた。

「ス、スジン？あなた何故ここに？それに電話番号って……。ど
ういう事？」

スジンは慌てながら説明をし出す。

「いや、あの、このパン屋が有名でたまたま調べたらヒョンさん
のお店みたいで……。沢山注文しようと思って、それで電話番号
を……。ね、ヒョンさん。」スジンはごまかそうと必死になっ
ている。

「そうなの、ヒョンくん？」

僕は少し黙っていたが、顔を上げるとシユリに話し始めた。

「ちょうどよかった。シユリ、実はみんなに黙ってたんだが、俺達
付き合ってるんだ。」

「えっ!？」

シユリはスジンを睨みつける。

スジンは諦めると話し始めた。

「私達、ちよつと前から、付き合ってたの。昨日逢ったのも偶然で・・。」

シュリは、苦笑いしながら喋り出した。

「そ、そうだったの？し、知らなかったわ。ヒョンくん、お茶御馳走様！」

シュリは、目に涙を浮かべ店を駆け出る。

「シュ、シュリ！」

スジンは彼女を追いかけるが、追いつけずに見失ってしまう。

「シュリ、ごめんね。ごめんね。」

スジンは涙を目に一杯溜めながら、走り去ったシュリを探していた。僕は、スジンに近寄り肩をなでるが、そんな僕の手を振り払いスジンは店の中へと戻っていった。

（シュリ・・、済まない。今はこうするしか方法がないんだ。）

僕は心の中で罪悪感に捕らわれながら自分を犠牲にしていた。

僕が店の中へ戻るとスジンはうなだれ落ち込んでいた。

「スジンさん、済まない。勝手な事を言ってしまったみたいだ。」

スジンは顔を上げ僕を睨み付けながら言った。

「よかったわね、あなたの望みが叶って！」

スジンは、涙を目に一杯浮かべている。

「俺だつて好きでこんな事をしているわけじゃあない！」

「もういいわ、プライベートな事は言わない約束だから。」

スジンは涙を拭い去り立ち上がる。

「シュリとはこれでいいんでしょ！今度は私の方に付き合ってもらうから。」

「ああ、わかつてるよ。」

スジンはバッグから手帳を取り出すと何やらメモを書き出しヒョンに渡した。

「私の携帯の番号。何かあったら電話して。それから、あなたの番号を教えて。」

「携帯は無いから、店の番号でいいか？」

スジンは目を丸くする。

「今どき携帯持って無いの？信じられない！」

スジンは呆れて言葉も出ない。

「いつも店にいるし、使わないからもつたいない。それにどうしても必要な時は母のを借りてる。問題ないさ。」

（この人の頭の中は本当におかしいわ。変よ。）

スジンは諦めながら、話し始める。

「携帯は私が買ってくるから、それまで店に電話するわ。それでいい？」

「携帯はいらないよ。使わないから。」

「ケンカ売ってるの！私が買うから使って！」

「いらない。」

「くっ、話しにならないわ。」

スジンは店を出ようとするが、立ち止まり僕を睨み付けると又戻って、僕の腕を掴み店の外へと連れ出した。

「ちょ、ちょ、ちょっと！何処へ行くんだ！」

スジンは黙ったまま腕を掴み離そうとしない。

しばらく歩いて行くとショウウィンドウが建ち並ぶ路地に着いた。

その内の一軒の店の中に入ると、そこは携帯販売店だった。

「いらっしゃいませ。」

店員は明るく挨拶をしてきた。

「すみません、携帯を一台お願い出来ますか？」

スジンは僕を座らせると横に立ち並んだ。

「いらないって！」

スジンは聞く耳を持たない。

「これが今流行りの機種になります。後は好みなんですけど、いかが致します？」

店員は淡々と話しを進めていく。

「い、いえ僕は……。」

僕が断ろうとすると隣りからスジンが答えた。

「この青色の色にして下さい。」

「承知致しました。」

僕を無視しながら話しはどんどん進んでいった。

「お客様、お待ちどう様でした。商品はこれになります。ありがとうございます。」

スジンは電話を受け取ると店を出た。

慌てて僕も後を追う。

「今日から使って！」

僕の目の前に先程買った電話を差し出す。

「いらないうって！」

「使って！」

スジンは凄い剣幕で僕を睨み付ける。

そんな彼女の気迫に一瞬たじろいでしまう。

「わ、わかったよ。そんなに怒る事ないだろ・・・。」

「あなたが素直に受け取ったら怒らなくて済むわ！ふん！」

スジンは怒りながら歩き始める。

（くそ、まあしょうがない。契約が済んだら返せばいい。）

僕は少し笑みを浮かべ、スジンの後ろを歩き始めた。

曇り始めた空から冷たい雨が降り始めようとしていた。

風邪と恋の病

帰り道、夕立の冷たい雨が僕達に降り注ぎ始めた。

「くっ、降り始めた！」

二人は近くの店の陰に身を潜める。

「もう、服が濡れちゃうじゃない！」

スジンは雨空を見上げながら愚痴をこぼしている。

「当分やみそうな雰囲気じゃないな・・・。」

二人は顔を見合わせるが、距離の近さに戸惑う。

「あなたが素直に携帯を貰えばこんな目にあわなかったのに！」

「はあ？俺は知らないって言うのにスジンさんが店まで連れ出したんだろ！勝手な事言わないでくれ！」

「呆れた。大体ね、今どき携帯を持つてないなんて変よ！」

「もういい！くだらない話しは止めよう！」

「くっ、くだらない？」

スジンは僕を睨み付けた後、黙り込んだ。

僕はスジンの顔を見ながらちよつと心配していた。

（言い過ぎたかな・・・。）

二人は黙ったまま、雨がやむのをひたすら待っていた。僕は周りの景色を見渡しながら昔の事を思い出していた。

（雨宿りなんて何年ぶりだろうか？）

懐かしさを感じながらふと彼女の横顔を見る。

スジンは、通り行く人を眺めながら、笑みを浮かべていた。

そんな彼女の横顔が一瞬、あの日の少女と重なって見えてしまう。

僕は目をこすりもう一度見直す。

（おかしいな、疲れてるのか？なんで重なるんだろう？きっと疲れ
てるんだ、俺は。）

そんな僕の視線を感じとったのか、スジンは不機嫌な顔付きで僕を見る。

「何よ、顔に何か付いてるの？」

スジンの言葉に僕は慌てる。

「べ、別に何でもないよ……。」

（絶対に有り得ない。あの子とはほど遠い……。）

「変な人……。」

彼女も又通り行く人を眺めながら、昔を思い出していた。

（今どこにいるのかしら……。）

そんな彼女の少し寂しげな表情に僕は目を奪われる。

（……しょうがない。）

「スジンさん、ちょっと待ってて下さい。」

僕は一言残し雨の中を走り出した。

「ちよつと、ヒョンさん！どこへ行くの？」

僕はそんな彼女の言葉を聞きながら、雨の降る中を走り続ける。

繁華街を抜け裏通りに出ると、小さな雑貨屋にたどり着いた。

店の入口に並べてある傘を一つ一つ見る。

多彩な色の傘の中から真っ赤な傘を一本抜き取り店員にお金を払った。

代金を払うと再び雨の中を走り出した。

僕は全身、ずぶ濡れだった。

そんな事など気にもせず、僕はスジンの待つ店に向かっていた。

スジンは心配そうに辺りを見回している。

「もう、どこに行ったのかしら？もしかして、家に一人で帰ったんじゃない……。いくら何でもそんな事は……。いや有り得るわ！」

スジンは一人になった寂しさに疑心暗鬼になっていた。

しばらくして、僕が雨の中を走って帰ってくる。

「どこに行ってたのよ！心配……。あなたずぶ濡れじゃない！」

「へえ、心配してくれたの？」

「違うわよ、一人で帰ったんじゃないか疑ってたのよ！」

（一人で寂しかったのかな？案外強そうに見えても違うんだな……。）

僕は膨れているスジンの目の前に買ってきた傘を見せた。

「もしかして、これを買いに行ってたの？」

「電話のお礼だよ。安物だけどね。」

スジンは少し照れながら傘を受け取る。

「あ、ありがとう。」

スジンは心からお礼を言った。

そんな彼女の仕草に僕はホッとしていた。

（初めて人らしい言葉を聞けたな・・・。）

「ね、ねえ、あなたの分は？」

「ああ、俺はもう濡れてるから、このまま走って帰ります。」

「でも、雨に打たれると風邪ひくわよ。」

「大丈夫、平気ですから。そろそろ、帰ります。スジンさんも早く帰って下さい。それでは。」

僕はそう言い残すと、又雨の中を走り出した。

「ちょ、ちよつと！」

スジンは引き止めようとしたが、僕は走り去って行った。

スジンは小さなため息を一つ出すと、僕の買った傘を広げてみる。

広げた真っ赤な傘は雨を幾度なくはじき返す。

真っ赤な傘を空高く上げると、スジンは嬉しそうに笑みを浮かべながら歩き出した。

一方、僕は濡れになりながらもようやく店にたどり着いた。

店のドアを開け妹を呼んでみる。

「スギョン！スギョンいないのか？」

家の奥から走りくる物音と共にスギョンが姿を見せる。

「お兄ちゃん、どこに行ってたの？あゝ、ずぶ濡れじゃない！」

「済まないがタオルを取って来てくれ。」

スギョンは慌てて取りに走る。

「はい、タオル。」

「おお、サンキューな。」

スギョンは心配そうに喋り出した。

「お兄ちゃんお店も開けっ放しでどこ行つてたの？」

「ああ、ちよつと急用でな……。」

「傘ぐらい持つていかないと風邪ひいちゃうよ。」

「気をつけるよ。」

「珍しいね、お兄ちゃんが忘れるなんて！」

「そうか？」

「んゝ、何かお兄ちゃん変！クン、クン、クン、怪しい……。」

（相変わらず鋭いな。）

「何でもないつて。しつこいな！」

スギヨンは疑いの目を外そうとはしない。

僕は妹の目を尻目にずぶ濡れになったシャツを脱ぎ捨て、部屋に向かった。

濡れた全ての衣類を脱ぎ着替え終わるとスギヨンに濡れた衣類をスギヨンに手渡す。

「済まないが風呂場に持つていってくれ。」

「えゝ、自分で持つていってよ！」

「代わりに床拭くか？」

妹は膨れながら衣類を受け取る。

「ん！？何これ？」

妹はズボンのポケットから先ほどもらった携帯電話を取り出した。

「あゝ、最新モデルの携帯じゃない！」

僕はハツと気づいて妹の手から携帯電話を取り上げる。

「お兄ちゃんずるい！どうしたのそれ？」

「どうしたもこうしたもない、買ったんだ。」

「それすんごく高いやつだよ。よく買えたね。いいなあ、私も欲しい！私のと替えようよ！」

（すっかり忘れてたな……。彼女からもらったなんて言えないしな。）

「駄目だ。これはいざという時に使うやつだからな。」

「最新モデルなのに・・・、もったいない。」

妹は残念そうにいつまでも僕の携帯電話を見つめていた。

「番号だけ教えておくから、必要以外には電話するな。」

「ハイ。」

僕は妹に番号を教えると、すぐさま店の床を掃除し始めた。

「ヘックション！ズズ・・・。」

「大丈夫、お兄ちゃん？くしゃみが出るけど・・・。」

「大丈夫・・・、へっ、へっ、ヘックション！」

「お兄ちゃん、私ができるから休みなよ。」

「俺の事はいいから、ご飯の用意を任せていいか？」

「わかった。あまり無理しないでね。」

妹は僕を気にかけてながらも台所へと向かった。

（ちよつと、寒いな・・・。風邪ひいたかな？）

僕は掃除を終わらせると、椅子に身を預けグツタリとしていた。

（体が重いな・・・。疲れもあるのかな？）体が少し熱くなってきた事などわかりもしない。

僕は座ったままいつしか目を閉じていた。

「お兄ちゃん、スープの味みて〜！」

台所から妹が呼んでいるが今僕には聞こえない・・・。

「もう、お兄ちゃんってば！・・・！？お兄ちゃん、お兄ちゃん、起きて！」

「ああ、スギョン。悪い、ちよつとうたた寝してしまったようだ。」

僕は立ち上がろうとするが体に力が入らない。

「おかしいな・・・。」

「ちよつと、お兄ちゃん大丈夫？ん、お兄ちゃん体が熱いよ！わっ、熱があるじゃない！」

妹はうるたえながら、どうしようか考え込んだ。

「お母さんは・・・、まだ帰ってこない時間だわ。ギョ又おばさんに電話してみよう！」

妹は電話を取りギョ又おばさんに電話をかける。

「プルルル、プルルル、プルルル。出ないわ……。どうしよう？
あつ、そうだ！」

スギヨンは、思い立ったように電話をかけた。

「プルルル、プルルル、ガチャ！はい、もしもし……。」「

スギヨンは顔色を変え話し始めた。

「あつ、シユリさん。今いいですか？実はお兄ちゃんが熱出しちゃ
つて、私一人だからどうしたらいいかわからなくて……。はい、
はい、薬ですか？探したんだけど見当たらなくて……。

はい、はい、わかりました。とりあえず布団に寝かせておきます。
あつ、そうですか！すいません、お願いします。」

妹は電話を切ると、僕を起こし僕の部屋まで連れて行った。

「あゝ、重い！」

僕をベッドに寝かせると妹はタオルと洗面器を持ってきた。

細い腕で濡れたタオルを力一杯搾ると僕の額にそつと乗せた。

「お兄ちゃん待っててね。もう少ししたらシユリさんが薬持ってくるからね。」

妹はそつと部屋を出ると、店の中を片付け始めた。

僕は熱にうなされながら、夢の中であの日の少女を探していた。

「ドン、ドン、ドン！シユリです。開けてもらえませんか？」

シユリは真剣な顔付きで店のドアを叩く。

「あつ、来た！すいません、すぐ開けます。」

妹がドアを開けるとシユリは飛び込むように店の中に入ってくる。

「すいません、シユリさん。他に頼れる人がいなくて……。」

「いいのよ、困った時はお互い様だもの？ヒヨくん容体は？」

「今部屋に連れて行った所です。今は寝てます。」

「そう……。あつ、これ薬よ。」

シユリは薬を妹に手渡した。

「寝てるのなら、私は帰るわ。」

「あの、シユリさん！不躰で申し訳ないんですが……。もう少し
だけ家にいてもらえませんか？」

「えっ、でも・・・。」

「私が片付けいや、母が帰ってくるまで、もう少しだけお願いします。」

妹の頼み込む姿を見たシユリはしょうがなくなる残る事にする。

「わかったわ。お母様が帰ってくるまでね。」

「ありがとう、シユリオ姉ちゃん！やっぱりお姉ちゃんは頼りになる。」

妹は大いに喜んだ。

「お姉ちゃん、ちょっとお店片付けてくるから、お兄ちゃんの事いい？」

「ええ、わかったわ。」

妹は笑顔で店の片付けに向かった。

(ふう・・・。)

シユリは大きく溜め息を漏らし僕の部屋へと入った。

横たわる僕の寝顔をシユリは少し悲しそな顔付きでずっと見つめていた。

時折、タオルを搾り僕の額へと当てる。

「ピロロロッ、ピロロロッ、ピロロロッ。」

どこからともなく聞こえてくる、電話の音・・・。

僕の机の上にあるあの携帯電話からだ。

シユリは戸惑いながらも僕の携帯に手を伸ばした。

「もしもし・・・。」

「！？あ、あの、どちら様ですか？」

「はい？」

「あっ、い、いえ、そ、そのキム・ヒョンさんの電話ですよ・・・？」

「今彼は風邪をひいて寝てますが・・・、どちら様ですか？」

「・・・そ、そうですか。すみません、またかけ直します。」

シユリは電話の向こうから聞こえてくる聞き覚えのある声にハッと気付く。

「スジン？あなたスジンよね。」

「えっ、あつ、もしかして、シュリなの？」

「あなたヒョンくんに何をしたの？」「何って？私がかしたとでも言いたいのか？」

「ヒョンくんは、めったに体を壊すような人じゃない！あなたが何かやらせたんでしょ！」

「し、知らないわよ。ただ……。」

「ただ何よ！言ってみなさいよ！」

あのシュリが感情をあらわにさせながら喋り続ける。

そんなシュリの言葉にスジンは、心苦しんでいた。

（あなた、やつぱり……。）

「じ、実は、私達は……。」

スジンはためらいながら本当の事を打ち明けようとした。

二人の会話を聞いた僕は、起き上がりシュリが持っていた電話を取り返すと喋り始めた。

「悪いな、寝てたから気付かなくて出られなかったんだ。」

「ヒョ、ヒョンくん……。寝てないと駄目だよ。」

「シュリ、すまなかったな。もう、大丈夫だから……。」

二人の会話が電話越しに聞こえてくる。

スジンはシュリとの事よりヒョンの事が心配になっていた。

「すまない、かけ直すよ……。」

僕はそう言って電話を切った。

「ちよ、ちよっと！ヒョンくん？」

切れた電話を片手にスジンは思い考え始めた。

スジンは辺りを見回しバッグを手にとると部屋を飛び出した。

「あら、こんな時間にどこに行くの？」

スジンの母親の言葉に彼女はたじろぐ事なく口に出す。

「知り合いが病氣らしいの。ちよっと出掛けてきます。」

玄関口で小さく頭を下げると彼女は走り出した。

僕はシュリと話していた。

「何故来たんだ？」

僕は冷たい言葉を浴びせる。

「スギヨンが電話をしてきて、あなたが熱出したって……。他に頼れないからって頼まれたのよ。聞いた途端いてもたってもいられなくて……。」

「そうか、悪い事したな。もう大丈夫だから……。すまないが家に帰ってくれ。」

「えっ、でもまだ起き上がれないはずよ。それに、お母様が帰ってくるまでと言う約束だから……。」

「シユリ、来てくれた事に関しては正直感謝している。だが、今日はもう帰ってくれないか？」

シユリは迷っていたが、帰る事にする。

「わかったわ、帰るわ。薬はスギヨンに渡したから、後で飲んでね。じゃあ……。そういえば、ヒヨンくん携帯買ったんだね。あんなに嫌ってたのに……。」

「あ、ああ……。」

「おやすみなさい。」

シユリが部屋を出ると掃除を終わらせたスギヨンが目の前に現れる。

「あっ、お姉ちゃん！掃除やつと終わったんだ。お茶でも飲む？」

スギヨンの言葉にシユリは顔を上げ喋り出した。

「ヒヨンくんが目を覚ましたわ。薬を飲ませて上げて。私は帰るか……。。」

「ええ！帰っちゃうの？せっかく来たのに……。お兄ちゃんがそう言ったの？」

シユリは黙って首を振り妹に謝る。

「ごめんね、ヒヨンくんも目が覚めたから、薬さえ飲めば大丈夫よ。それに、遅くなれば親も心配するから……。」

「本当は、お兄ちゃんが言ったんでしょ！後でこっぴどく言っとくからね！」

スギヨンの言葉にシユリは笑いながら帰って行く。

「ごめんなさい、助かりました。」

「そんな、何もしてないわ。それに……。」

「何か？」

「ううん、何でもない。おやすみなさい。」

シユリは浮かない顔付きでゆっくりと歩き出した。

シユリと入れ違いになるようにして、スジンが店までたどり着く。

スジンは両手で大きな袋を抱き抱え息を切らしながら、店の前に立つ。

彼女は息を整えると店のドアを叩いた。

「夜分すみません。」

「ハイ、ちよつと待ってて。」

中から妹のスギヨンの声がするが、スジンにはまだ誰なのかは知るよしもない。

（シユリの声とは違うわね……。違う女かしら？）

スジンは気にしながら待っているのと店のドアが開いた。

「すみません、お待たせしました。」

「あのー、ヒヨンさんは……？」

スジンの言葉に妹は彼女を舐めまわすように見回す。

（へえ、綺麗な人。こんな人お兄ちゃんの知り合いにいたっけ？）

「すみません、お兄、兄は風邪で寝てますが……。」

（妹さん……か。）

「あつ、まだ調子が悪いんですか？」

スジンは心配になってきた。

「あのう、まだシユリはいますか？」

「シユリオ姉ちゃん？さっき帰りましたけど……。お友達ですか？」

「ええ、まあ……。」「

（シユリ、帰ったんだ……。）

店の方から聞こえてくる話し声に僕はベッドから起き上がった。

（シユリの奴まだ帰らないのか？）

僕はベッドから出ると、ふらつきながら話し声の聞こえる方へと歩き出した。

スギヨンは僕の姿に気付いて、慌てて近寄ってくる。

「駄目だよ、まだ寝てないと……。」

妹の言葉も聞かずに店のドアへと向かう。

「シュリい加減・・・!？」

僕はスジンと目線が合いながら彼女の来た事に驚く。

スジンは、ハツと気付き両手で抱えていた袋を後ろに隠した。

「トヨ、トヨンさん、調子はどう？」

さっきまでとは違い強がりを見せながらしゃべり出す。

「大丈夫だ……。ゴホッ。それより何しに來たんだ？」

ヒヨンの言葉にスジンは戸惑う。

「べ、別に近くを通りがかっただけよ。電話もかけると言っただけよ。かかってこないからね！」

「そんなのゴホッ！すぐにはゴホッ！無理だろ……。すまないが帰ってくれ。」

僕はエライのを我慢しながらしゃべり続けるがさすがにまだ調子がない。

「お兄ちゃん、大丈夫？すみません、今日はもう帰ってもらえませんか？」

妹はスジンに訴えるように話す。

「あつ、わ、わかりました。すみません。」

妹は僕に肩を貸しながら僕を部屋へと連れて行く。

スジンは心配そうな顔付きで僕のそんな背中を見つめ続けていた。

彼女の思いがけない行動に、僕は立ち止まりスギヨンにある事を頼んだ。

「スギョン、すまないがあの人を入れてやってくれないか？」

「えっ、何で？」

スギヨンは目を丸くしながら僕に聞く。

「せっかく来てくれたんだ。ゴホッ、店に入ったら、ゴホッ、お茶

と奥にあるあのパンを一つ出してやってくれないか？」

僕は妹に頼むと目を閉じ眠りについた。

スジンは、渡しそびれた袋を抱え歩き始める。

（せっかく来てあげたのに……。ん、私何してるんだろ？何であんな奴の為に！）

「あのー、すみません。」

妹の声にスジンは振り返る。

「ちょっと、いいですか？」

スジンは少し驚きながらも店の方に戻り始める。

「お兄ちゃんに頼まれたんですけど……。時間ありますか？」

スジンは妹に言われるがまま、店の中へと入って行った。

「そこにお座り下さい。今お茶出しますから。」

「いえ、そんな……。お茶なんて。」

妹はお茶と奥にあつたパンを一つ彼女に差し出した。

「な、何でパンまで……。ま。」

「わかりません。お兄ちゃんがそうしろって！頼まれた事、聞かないと後で怒られるから。あのう、失礼ですけどお名前は？」

「ユ・スジンよ。じゃあ、あなたは？」

「妹のキム・スギョンです。」

二人は笑みで答え合う。

「どうぞ、パン食べてみて下さい。」

スジンは差し出されたパンを一口、口に入れと、何とも言えない甘味が口の中に広がる。

スジンは驚くような顔付きでパンを見つめた。

「美味しいでしょ、それお米のパンなんです。」

「お米で出来てるの？美味しいー！」

「いつもはそのパンは決まって、家族もしくはお兄ちゃんの大切な人が来た時にだけ出すの。今日は作る日だったからよかったわ。」

「大切だなんて……。そんな関係じゃあ……。」

（恋人契約者だなんて言えないわ。）

スジンは困っていた。

「いいえ、お兄ちゃんが私に頼み事するなんて、めったにないから……」

「えっ！」

スジンは驚きを隠せない。

（えっ、何？この感じ……。）

スジンはいても立ってもいられず立ち上げる。

「すみません、ご馳走様でした。か、帰ります。」

「えっ、もう？じゃあ、ちよつと待ってて。パンを紙袋に入れるから。」

妹は残ったパンを紙袋に入れスジンに手渡した。

「すみません、これで……。あつ、これ、よかつたらヒョンさんに……。」

スジンは持っていた袋をスギヨンに渡すと店から慌てて出て行った。

「変な人ね……。でも、綺麗な人ね。シュリお姉ちゃんよりも綺麗かも……。袋の中身は何かしら……？」

妹は袋を開けると中には沢山の薬が入っていた。

「す、凄い量の薬だわ！色んな薬が入ってる！栄養ドリンクまで……。」

そんな彼女の気遣いを眠る僕は知らない。

家に帰るスジンは、もらったパンの紙袋を大事そうに抱え歩いていた。

（あいつ大丈夫かな？いいや、いい気味よ……。）

そんな強がりとは裏腹に実は、心配している自分の感情に気付いていない。

そんな彼女は紙袋を見た途端、思わず笑みを浮かべていた。

自分の渡した薬が僕に喜ばれる事を思い浮かべ、スジンは家路へと帰って行った。

思い出の味

日も明けない朝、店の奥からいつものように生地を叩きつける音が響きわたっていた。

熱も下がった僕は、いつものように仕事に励んでいた。

家の奥から物音と共に母が起きてくる。

「ヒヨン！もう大丈夫なのかい？」

「あつ、母さんおはよう。昨日は寝ててごめん。」

「そんな事はいいんだよ！病院から帰ったら風邪ひいて寝こんでるつて、スギヨンが言うもんだから・・・。あの子も電話すればいいのに・・・。ごめんね、知らなかったんだよ。」

「気にしないで、こうして元気になったんだし！ああ、スギヨンを責めないでよ！あいつもあいつなりに考えてした事だからさ。」

「それはいいけど・・・、あまり無理はしないでね。病み上がりなんだから！」

「わかつてるよ、母さん。」

母はエプロンを着ると隣りで手伝い始める。

「母さん、大丈夫だから。」

「子供は親に口出ししないの！ほら、次！」

僕はそんな母の姿に喜びを感じていた。

二人は下拵えを終え、テーブルで一息ついていた。

「ねえ、母さん。父さんの様子はどうだった？」

母は顔をしかめたまま黙っていた。

「何かあったの・・・。」

母は重い口を開き話し始めた。

「ヒヨン、父さんね癌の進行が思ってたより早いみたい・・・。このままだと・・・、長くても冬まで持つかどうか・・・。」

母の言葉を聞き、僕は頭が真っ白になった。

「だ、だって、この前までは・・・。」

母は涙を流し話し続ける。

「父さんの苦しむ姿を見てると、何にも出来ない自分が情けなくて・・・ヒヨン、母さんどうしたらいい？」

母は泣き崩れうずくまった。

「か、母さんあんまり泣くとスギヨンに聞こえるよ・・・。」

「うつ、うつ、そ、そうだね・・・。あの子にまだ・・・。」

母は涙をこらえ、顔を上げる。

僕は母の顔を見つめるとスギヨンの話を　し始めた。

「母さん・・・、スギヨンに話そう。」

「ば、馬鹿な事言うんじゃないよ。あの子にはまだ言わないと約束した筈だよ。あの子が知ったら・・・。」

「スギヨンが知ったら確かに落ち込んで、学校どころじゃなくなるのはわかってるよ。でも、このまま父さんが苦しんでいる事を知らなかった方がもつと苦しむ筈だよ。スギヨンに言つて、みんなで病院に行こう。」

母は黙り考え始める。

「ヒヨン、あの子大丈夫と思うかい？」

「ああ、最初は落ち込むかもしれないが、父さんと母さんの子供だよ！きつと大丈夫さ・・・。」

僕も母にはそう言ったものの自信は無かった。

「いつ話すんだい・・・。」

「スギヨンが学校から帰つて来てからにしよう・・・。だから、母さんも今日は病院には行かないで家にいて欲しいんだ。」

「わかったわ。」

「スギヨンには出て行く時に言っておくから。」

僕はそう言つて店の奥へと姿を消した。

僕は釜の片隅で涙を流し一人心中で泣き叫んでいた。辺りも明るくなり、店の前で僕は空を眺める。

（あつちは雲が多い・・・、雨か・・・。）
予感的中する。

店を開ける頃には、雨が降り始める。

カウンターから窓越しに降り続く雨を眺めながら、スギヨンに話す言葉を考えていた。

一人考え込んでいると突然、店のドアが開いた。

「うつす。」

ドンホンだ。

「あつ、ドンホン……。おはよう。」

考え込んでいたせいか、彼等が来る時間帯をすっかり忘れていた。

「ヒョンくん……。おはよう。体の方は大丈夫？」

シユリも後ろから姿を見せる。

「あ、ああ、昨日は済まなかったな。大丈夫だ。」

僕はシユリからの視線を避けながら礼を言った。

「シユリから聞いたけど、風邪ひいたんだってな！大丈夫か？」

ドンホンは心配そうな表情で話す。

「もう、大丈夫だよ。心配かけたみたいで悪いな。」

「そんな事はいいよ。ヒョン、ちよつといいか？」

ドンホンと僕は店の奥へ入って行き話し始める。

「シユリの前じゃあ話せないからな。ウオンの奴、学校には来てなかった。電話も何回かかけたんだが出ないんだ。家にもいないし・

・。

「そうか……。」「

「何かわかったら電話するから、いいか？」

「済まないな、ドンホン。」

「別にいいよ、気にするな。」

ドンホンはそう言って、シユリの所へと戻っていく。

シユリは少し沈んだ顔をしながらドンホンと店を後にした。

（ウオン……。）

ウオンに話す事が沢山あるのに、連絡がつかない。

苛立ちが僕を苦しめていた。

喉が渴いた僕は、家の中へと戻った。

食器棚からコップを取り出そうとした時、大きな袋に気が付いた。

「何だろう？」

袋の中身を見て僕は驚いた。

「こ、これ、全部薬か？」

スジンが持つて来た薬である。

それとは、知らずに僕はある勘違いを起こす。

「シユリじゃあないな・・・、スギヨンか！」

僕は怒りをあらわにしながら、水を飲み干す。

「スギヨンの奴、薬は高いのにいくら俺の為とはいえ無駄遣いしすぎだ！起きてきたら・・・。」

僕は腹を立てながら、店へと戻った。

学校に行く時間にはまだ早いが、スギヨンが起きてきた。

この頃、何とか早起きするようになってきたが、そんな事は今の僕にはどうでもよかった。

「ふあゝあ・・・。おはよう、お兄ちゃん。」

目をこすりながら妹は、僕に挨拶をするが腹を立ててる僕は無視していた。

「ん、お兄ちゃん。ねえ、お兄ちゃんってば！」

僕は妹の顔を見ると袋を目の前に見せた。

「これお前が買ったのか？」

怒り口調で妹を問い詰める。

「ああっ！言っの忘れてた！」

（やつぱりか・・・。）

「こんなに沢山買ってどうするつもりだ！俺を薬漬けにするのか！大体お前は無駄遣いしす・・・。ん、何だって？」

「違うよ、私じゃない。スジンさんが持つて来たんだよ！私も袋を開けた時はびっくりしたけど・・・。」

「そ、そうか・・・。済まない、スギヨン聞きもせずに怒ってしまった。」

「いいの、私も言っの忘れてたし。それよりご飯食べよ、まだでし

よ。」

妹はそう言つて家の中へ入っていく。

店の看板を裏返し、僕も食事に行く。

袋の中から栄養剤を取り出し、うつすら笑みを浮かべていた。

（まったく、誰がこんなに飲むんだ？）

カウンターに栄養剤を置き僕はみんなの待つテーブルへと向かった。

「オハヨー、オハヨー、姫様オハヨー！」

王子様をかたどった目覚まし時計が時間を知らせる。

「オハヨー、オハ、ガチャン・・・！」

寝ぼけながら時計を止めたのはスジンである。

「ふあゝあ、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ・・・。ああ、もう朝。」

スジンはベッドから飛び降り、髪を整えると着替え家のリビングへと向かう。広いリビングの大きなテーブルには家政婦のキミが沢山の朝食を並べていた。

「お父さん、お母さんおはようございます。」

「おはよう、スジン。待ってたのよ。」

スジンは大きな椅子に座ると何か嫌な予感に駆り立てられる。

スジンは父親の顔を伺うが、父親は眉間にシワを寄せていた。

（昨日の事かな・・・。ヤバイ雰囲気だわ。）

「わ、わあ、美味しそう、いただきます。」そんな彼女の行動を見ると、母親はついに口を開いた。

「スジンさん、昨日は突然どこに出かけたの？もしかして、例の男の所？」

スジンは吹きそうになるがこらえ、ごまかし始める。

「ち、違います。出る時に知り合いの所って言いませんでしたか？」

「行き先がわからないから、ちょっと心配しただけよ。ねえ、あなた。」

母親の言葉に父親は、スジンを見つめる。

「スジン出かけるのはいいが、行き先だけはしっかりと伝えて行きなさい。わかったね。」

「はい・・・、お父さん。」

父親はスジンに話し終えると席を立ち部屋へと戻っていく。

「スジンさん、お父さんはあなたの事が心配で言ってるのよ。わかったわね。キミ、後は頼むわね。」

「はい、奥様。」

母親は話しを済ませると、部屋へ戻っていった。

家政婦のキミも片付けの為、台所へ姿を消していった。広いテーブルに一人残ったスジンは寂しそうに食事をしていた。

スジンは昨日のヒヨンの事を思い出しながら、ゆっくりと箸を伸ばしている。（あいつ、治ったかな？そ、そういえば・・・。）

スジンは思い出したように、部屋に戻る。

机の上に置いておいたあの紙袋を掴み、テーブルへと戻る。

袋からパンを取り出すと小さくちぎったパンを口に運ぶ。

「ん、美味しい！」

彼女はパンの味に酔いしれながら、一人朝食を楽しんでいた。

そんな折、戻ってきた家政婦のキミが珍しそうに覗き込んでくる。

「ああ、キミさんも食べてみる？」

「い、いえ、そんな・・・。」

「いいから、食べてみてよ！」

家政婦のキミは、スジンの言うがまま、パンを少しちぎり口に運ぶ。

「！？お、美味しい。お嬢様、凄く美味しいです。」

家政婦のキミは細い目をいっぱいに広げながら、そのパンの味に驚いていた。

「でしょ！あつ、でもキミさんの作ってくれてる料理も美味しいわ。」

「お嬢様・・・。」

家政婦のキミとスジンは仲が良く、いつも一人になる時には必ずキミが面倒を見ていた。

「キミさん、半分上げる。はい！」

スジンはパンを半分にちぎりキミと二人で食べた。

「あゝ、食べた、食べた！」

食事を終えたスジンは部屋のベッドに横たわり、ヒヨンの事を気にかけていた。

「今頃どうしてるかな・・・、あいつ。っていうか、何心配してるんだろ！わざわざ薬まで置いていつてあげたんだから、治って当たり前よ！大体、スカポンタンの筈なのに、風邪ひくなんて有り得ないわ！」

スジンは起き上がると、出かける準備を始める。
可愛らしい服を選ぶと化粧をし部屋を出る。

「お父さん、友達の所へ出かけてきます。」

スジンは、父親のいる部屋のドア越しから声を掛ける。

「わかった、もし遅くなりそうなら電話しなさい。」「はい、お父さん。では、いつてきます。」

出かける事を父親に伝えると、スジンは軽やかに家を出る。

玄関口から雨の降る空を見上げ、ヒヨンからもらった傘を空高く開いた。

「うふふ　　」

スジンは上機嫌に傘を回しながら家を後にする。

スジンの向かう先はヒヨンの店である。

その頃、僕は朝食を済ませ、仕事に励んでいた。

仕入れた洋梨を使いパイを作るが、僕らみたいな小さなパン屋では、季節の果物を使って作るにも、数に限りがあった。

果物は値が張るからだ。

農家や知人から仕入れるにも、たくさんは望めないし、材料一つにしても無駄にはできない。

だから、仕入れた果物を日ごとに振り分けパンを作っていた。

父親も元気な頃は、旬の物を使ったパンには、熱が入っていた。
安くみんなに食べて貰いたい。

儲けなど考えず、安くしようと一生懸命だった。

近所の子供が喜んで買いに来る姿は、父を活気づけていた。

そんな光景も僕にとって誇りだった。

子供の頃は父が作る旬のパンが待ち遠しいかった。

甘い香りと巻き付くような酸味、その味に誰もが頷いた。

そんな父の味を思い出しながら、僕はパンを作り上げている。

尊敬する父の味に近づく為にも・・・。

僕の挫折

旬の果実を使つたパンを作り上げた僕は、一息ついていた。家の奥から妹が、学校に行く為に出てきた。

「あつ！お兄ちゃん、支度終わったの？」

「ちょうど、今な。スギヨン、一つ持っていけ！」

僕は焼きあがつたばかりの、洋梨のパンを一つ妹に渡した。

「ありがとう、お兄ちゃん！そういえば、お母さんから今日は早く帰つて来なさいと念を押されたけど……。何かあつたの？」

「あつ、ああ、何か知らないけど、話があるみたいだぞ。」

「ふん。まあいいけど……。あつ！もうこんな時間！じゃあ、いつてきます。」

妹は、慌てて家を飛び出して行つた。

「慌てると、転ぶぞ。」

まだ、何も知らない妹を見送りながら、僕は、妹に対する言葉を探していた。

（スギヨンなら、きっとわかつてくれるさ……。家族だから。）

そう自分自身に言い聞かせながら、僕は店に戻って行つた。

冴えない表情をしながらも、僕は一人焼きあがつたパンを並べていた。

そんな僕を影から母がじつと見つめていた。

見かねた母は、僕の隣に立ち、店の用意を手伝い始めた。

「母さん、いいよ。俺がやるから。」

母は僕の顔を見つめると、起こりながらこう言つた。

「ヒヨン、あんたどういふつもりだい！」

母の突然の言葉に僕は戸惑つた。

「な、何が？」

「何がじゃない！今のお前の姿見たら、お父さんは何て言うかね？情けない。」

「えっ！」

「今の自分の顔をようく鏡で見て来なさい！お店は私がやるから！さあ、どいて！」

母は自分を誇示させるかのように、僕を引き離した。返す言葉も見つからない僕は、一人部屋に戻った。

そんな僕の後ろ姿を母は心配そうに見つめる。

僕は机にある鏡で顔を確かめていた。

（こんな顔してるのか、今の俺は・・・。）

こんな情けない姿の自分を、父は何て言うのだろうか？

いまだに父に追いつけない自分は、病氣と戦っている父に何て言えるのだろうか？

溜まっていた不安が頭の中から離れなくなっていた。

父の病状を母に聞かされて以来、少しずつ氣力が病んで来ていたのは確かだった。

僕は、あの御守りを手に取り出し、窓際に翳しながらじっと眺めた。
（父さん、俺どうしたらいいんだ・・・。教えてくれよ、父さん。）
御守りを握り締め、僕はうずくまっていた。

母は僕を心配しながらも一人店を切り盛りしていた。

「まあ、珍しい。久しぶりじゃないの？」

近所の知り合いの人々達との久しぶりの会話に、母は喜びを隠せないでいた。

そんな時、一人の女性が店を訪ねて来る。

スジンである。

おしやれな服を着た彼女は、輝かしく見えていた。

彼女は店の中に入ると、ヒヨンの姿を探していた。

母はそんな彼女の行動に気が付き声をかけた。

「お客さん、何かお探ですか？見ての通り狭い店ですが、何かありましたら遠慮なしに言っして下さい。」

そんな母の言葉に、スジンは一瞬ためらったが、話を始めた。

「あのう、ヒヨンさんはどこに・・・。」

「えっ？ああ、ヒヨンですか？今はちよつと、休んでますが・・・」

スジンは、顔色を変え母に問いただした。

「風邪、まだよくなつてないんですか？」

母はそんな彼女の反応を見ると、考えながら答えた。

「失礼ですが、お名前は？」

「ユ・スジンと言います。」

母は、彼女の容姿を見ながら、どこか懐かしさを感じていた。

スジンは、母の顔を覗き込むように、様子を伺っていた。

そんなスジンに気づいた母は、我を取り戻す。

「ああ、ヒヨンに用事なんですよね？えつと、スジンさんでしたね。変わりに私が聞きますが、何の御用でしたかね？」

「い、いえ、別に何でもありません。ただ、近くを通ったものでしたから・・・。すみませんでした、失礼します。」

スジンは、母に一言謝ると、さつと店を出た。

「ちよつと、スジンさん！」

母は止めようとしたが、彼女は走り去つて行つた。

「ふう、へんな子ねえ・・・。でも、とっても可愛らしい子だつねえ。ヒヨンの知り合いにあんな子いたかしら・・・。」

母は、スジンの走り去つた方を気にかけながら、また店の中に戻つて行つた。

スジンは、店から少し離れた場所で、ようやく立ち止まつた。

息を切らしながら、店の方を振り返る。

「はあ、びつくりした。あの人、あいつの母親かしら？大体、何で私があいつの様子を見に行かなきゃならないの！あいつはただの契約者よ、契約者。どうなろうと知らないわ！」

スジンは、怒りながら歩き出すが、ヒヨンの容体が気になっていた。「薬、効かなかったのかなあ・・・。大丈夫かなあ・・・。あつ、そうだ！」

スジンは、バックから携帯電話を取り出し電話をかける。

「あつ、もしもし、ミンジュ？私、スジン。うん、実は訊きたい事があるんだけど・・・。」

スジンは、友人であるミンジュに話を聞くと喜んで、傘を回しながら歩き始めた。

昼過ぎ、雨が上がり雲の間からひよつこりと日差しが照り始めた。部屋の窓から差し込んできた日差しに、僕はようやく顔を上げた。手に握り締めた御守りを確かめるかのように、目の前でぶら下げる光を失っていた御守りに、窓の日差しを照りつける。

七色に輝き始めた御守りに、僕はそつと呟く。

「情けないな、こんな俺は・・・。病魔と戦っている父さんに、顔向けなんて出来ないよな。まだまだ、自分にはやれる事、やる事が沢山あるじゃないか！くよくよするな！キム・ヒョン！」

青の御守りはそんな僕へ答えるように、七色の輝きをより強く発する。

僕は小さな笑みを浮かべながら、立ち上がると両手でほつぺたを叩き、気合いを入れた。

「よっしゃ！やるかあ〜！」

御守りを窓際にかけ、エプロンを身にまといながら僕は部屋を後にした。

太陽の光を一杯に受ける青の御守りは、そんな僕を見送るように小さく鈴を鳴らしていた。

風もないのに・・・。

店に出ると、母が一人汗を流していた。

そんな母の働く姿に僕はちよっぴり嬉しさを感じていた。

「ふう、久しぶりだからさすがにこたえるねえ。あら、ヒョン。どうしたんだい？もう、今日は休んどきな！」

母は僕に冷たく言うが、本心では無い事などすぐにわかる。

元気の無い自分を心から心配していたからだろう・・・。

「母さん、ごめんよ。もう、大丈夫だから。父さんに恥じないよう頑張るよ！」

母は振り返り僕の顔をそつと撫でた。

「わかればいいんだよ。でも、苦しい時があるんなら正直に言いなさい。何にも出来ない母さんだけど、お店ぐらい出来るからね。それに、あんたに任せつきりだった私にも責任はあると思ってたから・・・。スギヨンの事もね。」

「母さん・・・。」

「あつ、そういえばお前が休んでいる間、スジンとかいう可愛らしい子が尋ねて来たよ。」

「えつ、スジンさんが？」

（何の用だろう？しかも、母さんのいる時にくるなんて・・・。何考えてるんだあの力エル女！遠慮つてのを知らないのか！）

「ヒヨン、どうしたんだい？何かあつたのかい？」

「い、いや、何も・・・。」

母は僕の態度を伺いながら、変に話出した。

「ねえ、初めて聞いた名前の子だったけど、どこの子だい？」

「えつ、ああ、シュ、シュリの友達なんだ。この前のパーティーに来てたんだ。」

「ふゝん。でも知り合つたばかりの子が何しに来たんだい？」

「そんなの知らないよ！パンでも買いに来たんじゃないの？」

「そんなにムキにならなくても・・・。」

「だって、母さんが・・・。」

「わかつたよ、もう聞かないから。でも、あんなお人形さんみたいな可愛い子、初めてみたよ。シュリちゃんもそうだけど最近の子は、みんな綺麗な子ばかりねえ。」

「母さん、お客さんが来たよ。」

「えつ、ああ、いらつしやいませ。」

母は慌てて、カウンターに戻っていった。

僕はため息を漏らしながらも、スジンの持ってきた薬に目を向けた。
（心配して、見に来たのかな？）

「いや、あの女に限って、それは無い。」

「ヒヨン、ちょっと。」

「あつ、はい。」

僕はまたいつもと変わらない日常に戻っていった。

家族という名のもとに

あれからスジンは、ミンジュと待ち合わせる為、ある場所で一人佇んで待っていた。

「スジン、ごめん！遅くなっちゃって！」

息を切らせながら、ミンジュが駆け寄ってくる。

「ミンジュ、遅くなるなら電話くれればよかったのに！待ちくたびれたわ。」

スジンは口をとがらせ、すね始めた。

スジンの性格から言って、待つ事など有り得ないが、いつもと違う彼女にミンジュも何かに気づいたようだった。

「今日は何かスジンらしくないわね。待ってるなんて、今まで無かったわ！不思議。」

スジンは、ミンジュの言葉を聞き、慌てて言い返した。

「ミ、ミンジュが時間を守るって言うから待ってただけよ！大体、あなたの言った時間に私が来たのに、いないなんておかしいじゃない！もういいわ、帰る！」

とうとうふてくされたスジンは、その場を立ち去ろうとするがミンジュは引き止めた。

「スジン、帰るとあれ買えないよ、どうするのかな？」

スジンはミンジュの言った言葉に立ち止まり、しばらく考え込んだ。
(くっ、ミンジュったら・・・)

「せつ、せつかく待ってたんだから、しょうがないわ。行きましょ！」

そんな見慣れぬスジンの姿に、ミンジュは笑みを浮かべていた。
ミンジュはスジンに駆け寄ると、スジンの腕を引っ張りながら、あの店へと向かい始めた。

僕は、母の手伝いもありいつもより仕事がかどっていた。

母は、久しぶりの仕事に少々疲れ気味だったが、僕にとって、両親

と仕事をする事は、何より楽しく嬉しかった。

「ふう、しばらくやってないと、こんなにしんどいもんかね？」

白髪まじりの髪を一つにまとめ、シワの増えた手や顔に小さな手拭い、そんな母の縮こまった背中が、妙に寂しく見えた。

母の持っていた箱を取り上げ、僕は母に話しかけた。

「母さん、後はやっておくからいいよ。休んでなよ。」

「今日はいいんだよ。最後まで一緒にやるから。」

「その言葉だけでもいいよ。久しぶりに母さんと仕事できて嬉しかったけど、後は僕一人で十分だから。」

いつの間にか、僕が気が付かないくらい成長していた事に、母はうつすらと笑みを浮かべた。

「そうかい？なら後は頼んで、わたしや買い物にでも出ていこうかね？」

母は首にかけたタオルを下ろすと、一人店の奥へと入って行った。

僕は母が無理をしないか、心配でならなかったのだ。

僕が成長した分、母も老いていく。

父のようにだけはなつて欲しくない、妹の為にも、僕の為にも……。

そんな僕も病み上がりのせいか、少し疲れ気味になっていた。

僕は何かを思い出したかのように、店の奥の台所に向かった。

台所のわきにある紙袋を、おもむろにさばくり始めた。

紙袋から取り出したのは、栄養ドリンクである。

（あつた……。）

僕は取り出したと同時に、ホッと肩をなでおろす。

蓋をあけ一気に飲み干した後、何故だか妙に嬉しさを感じていた。ほろ苦く甘い味が、僕を元気にさせる。

「さて、もう一踏ん張り！」

威勢よく声を張り上げ、僕はまた店に戻って行った。

その頃、スジンとミンジュは、ようやく目的の店にたどり着いていた。

「ミンジユ、本当にここなの？」

「ええ、そうよ！さっ行きましょ！」

見た目は、古びた瓦作りで出来た小さな料理屋。

いかにも、今にも潰れそうな店にスジンは不安を隠せない。

スジンはミンジユに腕を引っ張られながら、しぶしぶ店の中へと入って行った。

店の中に入ると、泥臭い匂いと、生臭い匂いが鼻を直撃する。

スジンは鼻をつまみながら、店の中の光景を見回していた。

「おじさ〜ん、おじさ〜ん！」

ミンジユは大きな声で、店の奥へと呼びかける。

「おい。」

微かにかすれた声が聞こえたかと思ったら、奥から一人の老人が姿を現す。

「おじさん、頼んでいた物、取り置きしておいてくれた？」

老人は、黙ったまま奥から大きなバケツを運んで来た。

老人が蓋を開けたその中身とは、スッポンであった。

「ミ、ミンジユ、これがそのスッポンなの？」

スジンは、初めて見るその姿にかなり引いていた。

彼女自身食べた事はあっても、その姿を見るのは初めてだった。

「ああ、ありがとうございます。ほら、スジンも御礼を言わないと！」

ミンジユは、スジンにけしかけるように言い放つ。

「あ、ありがとうございます。」

バケツの中身を横目で覗きながら、スジンは小さな声で御礼を言った。

スジンの情けない姿に老人もミンジユも笑っていた。

夕暮れも近づき、妹のスギヨンが帰る頃だ。

僕は一人そわそわしながら、帰りを待っていた。

母は、家で食事の用意をし始めていた。

母も落ち着かないからだろうと、母の気持ちを察していた。

「ただいま〜！」

そんな、僕や母の気持ちをいざ知らず妹は元気よく帰ってきた。

「スギヨン、おかえり。」

今の僕に言える精一杯の言葉だった。

「お母さんは？」

「中で、夕食の用意をしてるよ。」

「ええっ！もう？せつかく一緒に作ろうと思ってたのに！お母さん！」

ふくれながら、妹は家へと入って行く。

まだ、蒸し暑さが漂う夕暮れ前が異様な雰囲気をかもち出していた。僕は店を早く閉める為に、片付けを始める。

「あれ？今日はもう終わりなの？」

通りがかりの客が、尋ねてきたが、僕は申し訳なく言う。

「すみません、今日はもう終わりなんです。」

いつもならここで、残りのパンを分けてあげるのだが、今日の僕にはそんな余裕も無かった。

（心苦しい・・・）

残念そうに帰る客の後姿は、いつ見ても嫌だ。

僕は気持ちをグツとこらえながら、片付けを終えようとしていた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんってば！」

店の中から怒ったように妹が出てきた。

妹によやく気付いた僕は我に帰る。

「ん、どうかしたか？」

「どうかしたかじゃないよ！何回も呼んだのに！」

妹は呆れた顔で僕に言った。

「ごめん、ごめん、ちよっと考え事してたんだ。謝るよ、スギヨン。」

妹に謝るが、僕の胸中は複雑なままだった。

妹は、僕のちよっとしたいいつもと違う仕草に、何か気付き初めていた。

そんな妹の目を尻目に、僕は店の片付けを早く終えようとまた働き

始めた。

「お兄ちゃん、お母さんが終わったら家に来てって……。」

「ああ、わかった。」

妹は僕に一言、言い残し家の中へと戻って行った。

日も暮れ出す時間になった頃、ようやく店の片付けにケリをつけた僕は、母達の待つ家へと戻った。

妹は母の手伝いをしながら、楽しそうに笑みを浮かべていた。

母は僕の姿に気付くと、さっきまでの笑みが嘘のように消え去った。妹もそんな母の表情に気付き、自分の知らない何かに疑問を抱いていた。

「スギヨンや、ご飯を運んで頂戴……。」

「あつ、はい、お母さん……。」

妹は、母に言われた通りに夕食の準備を始める。

母は黙ったまま、出来上がったチゲをお椀に注いでいった。

夕食の準備も整い、皆がテーブルを囲んで座る。

料理は美味しそうに並べられているのに、家族の間には異様な雰囲気漂っていた。

「ね、ねえ、二人共どうかしたの？」

最初に、話を切り出したのはスギヨン。

母と僕は顔を見合わせると、神妙な顔つきで黙ってしまった。

僕はスギヨンの顔を見つめると、ゆっくりと口を開いた。

「スギヨン、実は今日はお前に話があるんだ……。」

スギヨンは二人の顔を見回しながら不安げな表情へと移り変わる。

「何の話？」

「父さんの病気の事だ。」

「お父さんがどうかしたの？」

妹の健気な表情に僕は、胸が痛い。

「父さん、もう永くはないんだ。癌なんだ……。」

妹は、僕の言葉を聞くと表情が一変する。

「えっ？癌？でも、お母さんやお兄ちゃんは、お父さんの病気は、

只の胃潰瘍だつて言つてたじゃない！二人して嘘ついてたの？」

二人の会話を聞いていた母は、スギヨンに話始めた。

「スギヨン、お前には嘘ついてたんだよ。」

父さんにお前には学校を卒業するまで黙っておくよう言われてたんだよ。」

「三人して、私を除け者にしてたの？酷い！」

妹は、目に涙を溜め二人を睨みつけた。

「俺も母さんもお前に言おうか、どうか迷っていたんだ。お前の顔を見る度、心を痛めてた母さんの気持ちも分かつてやって欲しい。」

「そんなの勝手だよ！お兄ちゃん、私だつて家族だよ。お父さんの体の心配をしなかった日なんて無かった……。」

病状が悪いのなら、はつきりそう言つてよ。もう私だつて、分かつてるつもりだよ……。」

妹は、本当の事を言われ無かつた事をとても悔しそうに訴える。

「スギヨン……、悪かつたよ。母さんもヒヨンも謝るから、本当に本当にごめんよ。」

母は涙ながらに妹に謝つた。

「も、もう、お父さん永くないの……？」

僕は黙つたまま首を縦に振る。

「お、お、お父さんが、お父さん……。う、う、うわぁん。」

妹は一気に泣き崩れその場に座り込んだ。

母はそんなスギヨンに近寄り、泣きながら抱きしめた。

「ごめんね、ごめんね、スギヨン……。」

僕はそんな二人の姿が、涙で霞んだ。

「ガタツ！」

突然、何かに当たつた物音に僕は気づいた。

店の方からだ。

「誰かいるのか？」

僕は思わず、店の方に怒鳴つた。

店の入口の影から、バケツを持ったスジンが姿を現す。

「ス、スジンさん・・・。」

「あの、ド、ドアをノックしたけど返事が無くて・・・。開いてたからつい・・・。あつ、こ、これ、体にいいって聞いたから、そのうまだ調子が悪いって聞いて・・・。」

スジンは、精一杯の言葉で僕に氣遣っていた。

「いつからそこにいた!」

スジンの想いとは裏腹に、僕は突然頭ごなしに怒鳴った。

「えっ、そ、それは・・・。」

僕の突然の態度に、スジンはたじろぐ。

「まさか、さっきの話聞いてたのか?」

スジンは顔色を変えながら、頑なに否定する。

「な、何の話?」

疑いの目を向けるが、彼女はしらをきる。

「そうか、聞いてないんならいいよ。すまない、突然怒ってしまった。」

「そんなあ、私が勝手に入ったのが悪いのだから、謝るのは私の方です。すみません。」

お互いに謝っていると、奥から母が出てきた。

「あら、あなたは・・・。」

「勝手にお邪魔してすみません。」

母はスジンの姿を見ながら僕を呼びつける。

「ヒヨン、知り合いかい?」

「ん、ま、まあ。」

そんなやりとりの中、妹も奥から顔を出す。ショックで、元気をすっかり無くしていた。

妹は、黙って歩き始め家を出ようとした。

「スギヨン、どこに行くんだい?」

母の言葉にも反応せず、ただ黙って外に出て行った。

「おい、スギヨン! ちよつと待・・・。」

僕の言葉にスジンは表情を変え、僕達に言った。

「私がついて行きます。」

スジンはスッポンの入ったバケツを僕に手渡すと、スギヨンの後を追いついて行った。

「お、おい！ちよつとつて、このバケツ何が入ってるんだ？」

母と二人で恐る恐る蓋をあけると、中には一匹のへんな生き物が元気に動いていた。

「う、うわあ。何だ？」

「ヒョン、これスッポンだよ！」

母の言葉にバケツの中にもう一度、目を向ける。

「スッポン？何でスッポンなんだ？」

スジンの行動に僕は、へんな意味で驚いていた。

スジンはふらつき歩くスギヨンの後について歩いていった。

通行人に当たりひざまずいたスギヨンに慌てて、駆け寄る。

「大丈夫？」

スジンの言葉に気づいたスギヨンは、彼女の顔を見るなり、思わず泣きついた。

スジンは、そつとスギヨンの肩を抱き寄せる。

「どうしたの？大丈夫？」

スジンは、本当は先ほどの話を全部聞いていた。

だから、スギヨンの泣く理由も知っていた。

スギヨンの泣く気持ちを彼女自身も共感する事が過去にあったからだ。

スジンは、スギヨンが泣き止むまで、そつと抱きしめていた。

それから、時間が経って、二人は公園にいた。

スジンが買ってきた飲み物をスギヨンに渡す。

「どうぞ。遠慮しないで、おごりだから。」

「ありがとう、スジンお姉ちゃん・・・。」

小さなベンチに二人は肩を並べながら、周りの景色に目を向けていた。

辺りが暗くなり始めているにも関わらず、見知らぬ父親とその娘は

楽しそうに、ボールで遊んでいる。

その光景を見るスギヨンの表情は暗かった。

スジンは、そんなスギヨンをみると突然、昔の話を切り出した。

「私ねえ、小さい頃に大好きなお母さんを亡くしたの。」

暗かったスギヨンは顔を上げ、スジンの話を聞き始める。

「お母さん……、お亡くなりになってたんですか？」

「うん……。私ね、兄弟とかいないの。一人っ子なんだ。いつもお母さんに引ッ付いていたんだ。お父さんは、仕事で忙しかったからほとんど家にいなかったんだ。」

よくある話よね……。

でも、お母さんは、そんな事を忘れさせてくれる、大切な存在だった。

ある日、学校から帰って来たら、いつもいるはずのお母さんが家にいなかった。

家にいたのは、知り合いのおばさんだけ。

おばさんは私の姿を見ると突然、泣き顔で私を抱きしめた。私には何が起こっているのか分からず、思わずおばさんに聞いたわ。（おばさん、どうしたの？お母さんは？）おばさんに連れられ向かった所は、病院の慰安室だった。お母さんの横たわるベッドの横で、お父さんが一人震えながら佇んでいた。私が近寄り声をかけると、お父さんは私を抱きしめ泣いていた。お父さんの涙を見たのはそれが最初で最後だった。お母さんの横たわるベッドの横で私は、泣けずに黙って立っていたわ。悲しみを通り越した感情に、私は泣けなかった……。」

「お姉ちゃん……。」

「ごめんなさい、実はあなた達の話聞いてしまった。昔を思い出しながら……。スギヨンさんは、幸せね。」

「えっ？」

「だって、お兄さんもいるし、お母さんだって。お父さんも重い病気だけど、まだ何かしてあげられるじゃない。私は、頼れる人もい

なかったし、結局お母さんに何もしてあげられなかった。その事が今でもずつと心残りなの……。スギョンさんには、今を大切にしたいの。」

スジンは目に涙を溜めながら話した。

「うん、お姉ちゃん。私、頑張ってお父さんの病気を治してみせる！お姉ちゃん、ありがとう。」

スギョンの元気が戻りスジンはうつすらと笑みを浮かべた。

「そういえば、さっきお姉ちゃん何持ってきたの？」

「帰ったら、分かるわ。」

「教えてくれたっていいのに……。」

スジンとスギョンは顔を見合わせ互いに笑っていた。

「じゃあ、私はここで。」

「お姉ちゃん、帰っちゃうの？」

「うん、用事も済ませたし、お父さんがうるさいから。」

「うーん、せつかく逢えたのに……。」

「また、今度行くからね。」

「本当？約束だよ。」

「ええ、約束。」

スジンとスギョンは、小指を交え約束をすると、スジンは街の中へと消え去って行った。

スギョンは、小さな溜め息をした後、母と僕の待つ家へと帰って行った。

綺麗に染まり始めた夕焼け空を眺めながら……。

思い出の中に

閑静な住宅街の通りを一人、スジンは歩いていた。

南に面した大きな家の前で立ち止まると、高貴に飾られた門をくぐり抜け、スジンは嬉しそうに階段を登り始めた。

細い小指を立て、じっと眺めると、小さな笑みまで浮かべていた。

スジンは、大きな玄関のドアを開け家の中へと入ると、目の前を誰かが通り過ぎようとしていた。

「あら、スジンさん。笑みなんか浮かべて・・・、何かいい事でもあったの？」

目の前に現れたのは義母、そう今の母親である。

「あつ、ただいまお母さん・・・。別に何でもありません・・・。」
スジンはよそよそしく話をそらす。

「まあ、いいけど。もうすぐ食事を用意させるから、あなたもそのつもりでね！」

「はい、お母さん。」

スジンの言葉を聞くと母親は、鼻を突き上げるように、部屋の奥へと向かった。

「ふう。」

スジンは溜め息を吐くとそのまま部屋へと向かった。

部屋に戻ったスジンは、ベッドに腰かけると思い出すかのようにまた笑みを浮かべた。

「不思議・・・、何だかわくわくする。」

こんな気持ち久しぶりな気がする・・・。」

スジンは机の引き出しから、そつと一枚の写真を取り出した。

写真には、一人の子供と綺麗な一人の女性が写っていた。

スジンは写真を指でなぞりながら、小さく呟いた。

「お母さん・・・。」

写真の女性は、生前のスジンの本当の母親である。

当然、一緒に写っている子供はスジンである。

写真に写っている、母親の姿にスジン悲しそうな眼差しで見つめていた。

スジンの脳裏には昔の思い出がよぎり始めていた。

「お母さん！もう、お祭り始まつてるよ！早く行こうよ！」

まだ、幼い手で母親を引っ張りながら、お祭りの場所に向かって走る幼い少女のスジンの姿があった。

「スジン、慌てなくていいのよ。ゆっくり行きましょう。」

母親は、そんなスジンに手を引っ張られ、息を上げていた。

「だって、お母さんのせいで出遅れたんだから、そんな事言わないで！あゝ！もうあんなに人がいる。早く行こうよ！」

スジンは人だかりを目の前に、興奮気味でいた。

そんなスジンの幼な心を目の前に、母親は優しい眼差しを向けていた。

「ごめんね、スジン。ゆっくり行きましょう。ねっ？」

「えゝ、早く見たい。」

スジンは駄々をこねながら、じつと人だかりの先を覗き込んでいる。母親は息を整えながら、ゆっくりと理由を話し始めた。

「まだ、本調子じゃないから、あまり走れないの。ごめんね、スジン。」

病気がちな母親は、精一杯の言葉で慰めようとするが、スジンはへそを曲げていた。

「お母さん、もう少し頑張ってみようか？」

スジンがお祭りを楽しみにしていた事を、母親は知っていた。

本当はまだ、体の調子が良くないのを医者に無理を言ってきたのだ。そんな事などスジンは知るよしもない。

「でも・・・、お母さんまだえらそうだからゆっくり行く・・・。」
スジンはギュッと母親の手を握りしめると、母親に小さく微笑んだ。

母親はそんなスジンの小さな体を抱き寄せ、嬉しそうにつぶやいた。
「ありがとう、スジン。」

スジンは母親の愛情にとびっきりの笑顔で答えた。
二人は手をつなぎながら、ゆっくりと歩き始めた。
人だかりの先には、屋台が並び、色とりどりに染まっていた。

母親と楽しみながら辺りの屋台に目を向けていると、一件の屋台に目が止まった。

一人の男の子と母親だろうか？綺麗な何かを眺めていた。
男の子は買ってもらった何かを嬉しそうにかざしながら母親と去って行った。

幼き日のヒヨンである。

スジンは母親につぶやき、屋台に向かうと目を輝かせた。

「わぁ、綺麗！」

色とりどりの御守りがスジンの目に飛び込んだ。

「いらつしやい！お嬢ちゃん、この御守りは凄いんだよ！」

「おじさん、何が凄いの？」

「聞いて驚くな！実は、望みの叶う御守りなんだ。」

「えー！！本当？何でも叶うの？」

「何でもとはいかないが、それぞれの御守りには運命が宿ってるのさ！例えば、ホレこの緑の御守りなんかどう見える？」

「どうって？うーん、綺麗な緑の御守りにしか見えないわ。」

「そうかい？じゃあ、この赤は？」

「それも・・・あれ？何か輝きが違って見えるわ。へ、変ね？お母さん、どう見える？」

「私には同じように綺麗な御守りしか見えないわよ。」

「ならそれがお嬢ちゃんの御守りだ。お嬢ちゃんの運命の御守り！運命の人に出会える御守りだよ！」

「運命の御守り・・・お母さん、買っていていい？ねっ、お願い！」
「いいわよ、スジン。すみません、これ下さいな。」

母親がお金を払うとスジンは大喜びで買った御守りを夜空にかざし

ていた。

周りの騒がしい声の中で鈴の音が鳴り響く。

「チリリン。」

母親の手を握りしめて楽しかったあの頃の思い出が、彼女の脳裏を覆いつくしていた。

いつしか涙を浮かべていたスジンは、ドアを叩く音に気づいた。

「コン、コン。スジンさん、スジンさん？」

「は、はい！」

スジンは慌てて涙を拭き取り、ドアに向かう。

ドアを開けると母親が、苛立ちながら待っていた。

「何回も呼んだのに、どうしたの？」

「ごめんなさい、少し横になってたので・・・。」

「忘れてたの？ご飯よだから、すぐきなさい。」

「わかりました。」

母親はツンとした態度で、部屋をあとする。

スジンは、写真を見つめると、そっと引き出しにしまい込んだ。

愛情を受けられない今のスジンをつなぎ止めているものは、母親との思い出だけ。

自分の時間、母親との思い出を思い出す時だけ、スジンは素直な気持ちになれていた。

スジンは立ち上がると、部屋を出ていく。

そんなスジンの姿に赤の御守りは部屋の片隅で、寂しそうに輝きを無くしている。

新たな風

大きな食卓テーブルに並べられた料理をよそにスジンの気持ちは冷めていた。

またしても、父親不在での母親との二人っきりの食事。

「スジンさん、食欲が無いの？」

母親の言葉にハッと我に返る。

「い、いえ、大丈夫です。」

変わり映えの無い風景にスジンの心は、ずさんでいた。

どんなに美味しい食事でも、味が無い。

家族なんて名ばかり、心の中はいつも一人なんだと……。

母親の見てる手前、食べない訳にはいかない。

皿に載ったパンを一つ手に取り、ちぎったパンを口に運んだ。

（！？あれ、美味しい……。）

いつもと仕入れているパンの味違う事に気づきスジンは目を丸くする。

よく見ると料理もいつもの物とは見た目から違っていた。

「どうしたの？スジンさん。パンの味が気に入らなくて？」

母親はさりげなく口に出す。

「このパン、いつものと違いますよね？」

スジンはとっさに口を開いた。

「パンだけではないわ料理もよ。今日は、キミの料理ではなく、お

父様がホテルから引き抜いてきたシェフの作ったものよ。若くて、

素晴らしい腕の持ち主よ。美味しいでしょ！」

確かにこのふんわりとした食感と何とも言えない甘味。虜になりそう……。

「入ってらっしゃい。」

母親の言葉と同時に背がスラッとした一人の男が部屋に入ってきた。

「この人が今回うちに来てもらった、チャン・ジンフさんよ。どう、

スジンさん？稀にいない色男でしょ！」

「お久しぶりです。お嬢様、チャン・ジンフです。覚えていられますでしょうか？」

スジンは顔をじつと覗き込んだ。

「・・・！？あなた、あのジンフなの？」

「はい、覚えていただけましたか？」

ジンフはさわやかな笑みを浮かべ答える。

「あら、スジンさん知り合い？」

母親は少し不服そうである。

「あつ、すいませんお母さん。実は彼とは留学時代の友人でして。」

「まあ、それなら話は早いわ。これから、彼にレストランを任せるようだから、スジンもそのつもりでね。」

「はい、お母さん。」

スジンは、懐かしさのあまり笑みをこぼしていた。

母親は食事を済ませると立ち上がり、スジンにこう言った。

「スジンさん、私はお父様に用事があるから出かけてくるわ。後の事はお願ひね、キミ。」

「はい、奥様。」

そう言い残し母親は、部屋を後にする。

二人は顔を見合わせると、お互いに吹き出した。

「ププツ！あつはつはつ！〜！シィ〜！！」

「あんまり笑うなよ。」

「だって、お嬢様って！あのジンフがだよ！クッククツ。」

「笑いすぎ！ほら、食べないとせつかくの料理が冷めてしまうだろ！」

「ごめん、ごめん。」

二人はまた顔を見合わせるとお互いに笑みを浮かべていた。

「あゝ、美味しいかった。ご馳走様でした。」

ジンフはそんなスジンを見ながら、ゆっくりと片付け始めた。

「ねえ、ジンフ？」

「はい、何でしょうか？」

スジンは舌打ちをしながら喋り始める。

「ジンフ、ちょっと堅くない？」

ジンフは顔を近づけ小さな声で呟く。

「しょうがないでしょ！俺は雇われシェフなんだから。」

「では、お嬢様。失礼します。」

ワゴンに食器を載せ終えたジンフは、静かに部屋を後にする。

そんな後ろ姿をスジンは寂しそうに見つめていた。

部屋に戻ったスジンは、また一人になっていた。

（ジンフかあ、何年ぶりかな。せつかく久しぶりに会えたのに・・・
。そおだ！）

スジンは立ち上がると部屋を出た。

キミに見つからないように玄関先をくぐって行った。

外ではジンフと相方で貨物車に食器などを載せていた。

車の影に身を潜めゆつくりとジンフに近づいていくと小声でジンフに呼びかけた。

「ジンフ、ジンフ。」

囁くような呼びかけにジンフは気付くと驚いた表情で近寄った。

「ス、お嬢様、こんな所見られたら何言われるか。」

「これ、これ。」

スジンは一枚の紙切れをジンフに手渡した。

手渡したのは彼女の携帯の番号とメルアドである。

「じゃあ、またね。」

スジンはそう言い残し家の中へと戻って行った。

ジンフはそんなスジンの行動に笑みを浮かべていた。

彼らの上には、綺麗な夜空と大きな月が顔を出し輝いていた。

そんな夜空を眺めるもう一人の男もまた彼と出会う日が近づこうとしていた。

絆

寝付けないヒヨンはゆっくりと目を開け殺風景な天井をじっと見つめていた。

まだ、日も明けない夜中の3時だ。

「・・・。」

父の病気、母への負担、妹のスギヨンの心境、全ての事が頭の中を駆け巡ってずっと寝付けずにいた。

自分ではどうしようもできない歯がゆさに苛立ちを感じながら体をスツと起こす。

そんな、やるせない思いの先は、パン工房へと向かう。

生地をゆっくりとこね始めるが、何度なく手が止まってしまう。

作業を止め、部屋の片隅にある古びた椅子に腰掛けると大きな溜め息をもらす。

最近の身の回りの変化にヒヨンは、疲れ果てていた。

（父さん・・・、俺はどうしたらいいんだ？）

そんな、頭を抱え込んだ姿をそつと、覗いたのは母親である。

母親は、そつと近づいてヒヨンの肩を抱き寄せながら言った。

「明日、みんなで病院行きましょう。現実から目をそらしてたら、いつまでも前には進めないから・・・。スギヨンもわかってくれると思うわ。」

母親は、目に涙を一杯浮かべ、ヒヨンに言った。

そんな、母親の顔を見つめながら、ヒヨンも溜まっていたものを吐き出すかのように、泣き叫ぶ声はいつしか暗い暗闇から明るい日差しへと導いていた。

朝を迎え、家族が食卓に集まると、母親はスギヨンに話始めた。

「スギヨン、今日は学校を休むと連絡をしておいたからね。」

「エッ？何で？」

キョトンとした顔で母親を顔を見つめていると、ヒヨンは話始めた。

「みんなで、父さんのいる病院に行くんだ。俺も今日は仕事は休むんだ。」

その言葉を聞いたスギヨンは、沈んでいた。

「スギヨン、そんな顔するな。父さんに会いに行くのに、そんな顔を見せたら、父さんが悲しむぞ。」

今のヒヨンが言える精一杯の言葉。

「うん、わかってる。わかってるつもりだけど……。」

スギヨンはスツと立ち上がり、部屋に戻って行く。

「スギヨン、ご飯は？」

そんな母親の言葉はスギヨンには届かない。

母親とヒヨンには沈黙した時間が、流れていくだけ……。

「母さん、やつぱり……。」

とヒヨンが話を切り出すと、スギヨンが部屋から出て来た。

「お兄ちゃん、いつまでご飯食べてるの？早く行かないと、お父さんが待ってるでしょ！」

そんな、スギヨンの精一杯の姿に、二人は心から喜びそして泣いていた。

それぞれの朝

日差しの強い朝。

そんな天気と重なるように、ヒヨンの顔色も輝いていた。

店先で待つ母とスギヨンを見つめながら、ヒヨンはしっかりと靴紐を結ぶと立ち上がり家族という絆をしっかりと胸に刻み込んだ。

「さあ、行こう。」

自分に言い聞かせるような言葉と共に、ヒヨン達は街の中へと歩き始めた。

ベランダに立ち、朝日に向かって背伸びをするのは、スジンである。

「うーん、いいお天気。」

そう言って振り返ると、ベッドの脇に置いてある携帯を手取る。

「ジンフめ……。連絡くれないなんて、失礼な人ね！」

腹を立てていると、ドアの向こうから、呼ぶ声がする。

「お嬢様、お食事のご用意が出来ました。」その言葉を聞いたスジンは、何かを思いついたような顔付きで、ニンマリと笑みをこぼすと軽やかに返事をした。

着替えを終え、リビングに向かうとテーブルには、朝とは思えない程の料理が並べられている。

焼きたてのパンに、鼻をくすぐるような料理ばかりだが、そんな料理には目もくれず、スジンはさっさと席につく。

そんな姿を立っていたジンフは、気にかけていた。

「お母様、おはようございます。」

ツンケンした眼差しで見る母親にスジンは頭を下げる。

「スジンさん、おはよう。みんな揃ったようだから、頂きましょ。」
皆が梯を進め始めてすぐ、スジンは梯を置き席を立った。

「あら、スジンさん。もう食べないの？せっかくシェフが作ってくれたのに……。」

スジンは振り返りジンプを見つめながらこう言った。

「昨日から友達から、連絡が無くて、とても食事どころではないんです。ごめんなさい、お母様。」

その言葉を聞いた母親は、ジンプを横目で眺めながら言う。

「あらそう。あなたの友達は薄情な人ね。顔を見たいわ!」

スジンは、振り返り部屋に向かうとその顔は、意地悪な笑みを浮かべていた。

策略の影

ヒョン達がちょうど駅前辺りにさしかかった時だった。

すれ違う人の表情にヒョンは目を奪われる。

黙々と歩く人々に小さな孤独感を感じていた。

人生とは、歯車一つで違った方向へと歩んで行く。

それを象徴しているかのように皆、それぞれ顔付きが違っていた。

前を向いて歩く者、下を向いて歩く者、人の目を気にしながら歩く者、様々であった。

（自分は、人の目にどのように映っているのだろうか？）

ふとそんな想いが、脳裏をかすめていた。

「どうしたの？ヒョン」

そんな母親の声に、我に返った。

「いや・・・、何でもないよ。」

自分の中にある弱さとは、人には言えない事情だとその時ヒョンは肌で感じていた。

駅前のバス停にたどり着くと、スギョンは一目散に走り出した。道路先を覗き込みながら、母親とヒョンに手招きをする。

「バス、間に合ったみたいだね。」

妹のそんな姿に、母親もヒョンも、家族の笑みをこぼす。

「スギョン、今日は父さんと出来るだけ、一緒にいような！」

ヒョンの言葉にスギョンは、大きく頷いた。

病院行きのバスの姿が見えたのは、それから間もなくである。

朝食の席を離れたスジンは、部屋に帰るとベッドに飛び込んだ。

「ウフフ、ジンフのあの顔！」

スジンは、一人笑い転げていたが、ちょっとした罪悪感と共にくる空腹感に眉を曲げていた。

「しまった、ちよつとでも食べてたら良かった・・・。」

スジンは、鳴るお腹を押さえつつ椅子に体を預けた。

(コンコン・・・。)

ドアの向こうより人の声がする。

「お嬢様、お嬢様。」

まぎれもなくジンプの声だ。

スジンは慌ててベッドに隠れると小さな声で答えた。

「誰ですか？」

白々しく言つと、ジンプは大きな声で答えた。

「申し訳ございませんでした！お嬢様。このとおりです。」

ジンプの謝る声にスジンは体を起こし、ドアを開けた。

「ちよつと・・・。」

小さく手招きしながら、ジンプを部屋に入れると、ドアを閉めスジンは笑い出した。

「ふう。スジン、頼むよ。」

ジンプは呆れていた。

「だって、ジンプが悪いんじゃない。せつかくメルアドまで教えたのに・・・。」

そう言つて、スジンはふてくされるが、ジンプの困った顔を見るとまた笑い出した。

「困った、お嬢様だ。」

そんな二人の会話をよそに、じつと見つめる母親の姿に二人は気づく様子はない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0428c/>

赤な彼女と青い僕

2010年10月22日11時21分発行